
通りすがりのナオ

田々中 七割

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

通りすがりのナオ

【Nコード】

N3719G

【作者名】

田々中 七割

【あらすじ】

この世界を守るために、この街を守るために、少女は数百年の眠りから目覚めた。その使命を負った少女は、けれど決して正義のために闘うのではなく、ただ自分の犯した罪を償うために、見えない敵に立ち向かうのだった。なにも起きなければいいのに――少女の願いをあざ笑うかのように、街に不気味な地響きが轟く。少女ナオが闘いの中で見つけたものとは…？

序章

序章

眠りに落ちる瞬間の、
なんと心地のよいことだろう。

わたしはその心地よさに、自分の心を少し正直にする。

「お前と別れるのは、少し寂しいな」

眠りにつこうとするわたしを強く抱きしめてくれている男の声が、
耳元で震える。

「何を言う。：すべて俺のせいだというのに」

男の目から落ちた涙が、わたしのほほを伝う。男の涙が熱いという
ことを、わたしは初めて知った。

「大勢の人が死んでしまった。そしてあの娘はどうなる？ 死罪は

免れまい、すべて、」

聞き取れないほどに潤み、震え、軋む声は、けれどわたしの心に
素直に溶け込む。

「すべて、俺のせいだ」

大火に包まれた江戸の町から、

せめてもの罪滅ぼしとして、

この男はわたしを背負って走り続けてくれた。

わたしの、この体を守るために。

「おまえにも酷いことを言ってしまった。俺におまえを責める資格
などあるはずがないのに。――許してくれ」

くす、とわたしは笑った。
いつもそうだ。

人はいつも、許し、許されることを願う。
しかも、最後の最後、別れの間際になって。

わたしもそうだ。

取り返しのつかない時間の終点で、
取り返しのつかない罪と後悔を、
図々しいことだと知りながら、
許してもらえるようにと願う。

わたしは男の肌の温もりに酔い、
人の心の可笑しみを愛し、
男を許せたことに安堵し、
わたしが決して許されないことを悲しみ、

数百年の、眠りについた。

第一章（1）

第一章（1）

まどろみの中からこんこんと湧き出るように、目覚ましのアラームが鳴り始めた。

そつと耳を撫でるようにささやいていたそれは、少しずつ音量を増し、ついに最大音量で部屋中に響く。その段階になって、初めて少女は目を覚ました。

枕元に向けて振った腕が、正確に目覚ましの頂点にあるスイッチを叩き、アラームを止めた。

「ん…」

少女は自分の胸に手を当て、記憶の中から拾い上げた自らの名を、慈しむように、詫びるように、つぶやいた。

「鈴木、奈緒…」

起きあがり、部屋を見回す。

「目が悪いのか。…やっかいだな」

奈緒はベッドから下りると、机の上にあった眼鏡を着けた。

はつきりした視界で改めて部屋を見回すと、窓の前に垂らした薄布からは朝日が漏れ射している。部屋は無機的で簡素な作りだけれど、調度や壁には、今まで見たことがないような華やかさがある。

部屋の隅には、山のように雑誌が積んであった。奈緒は一冊を手に取り、ぱら、と開いて慌てて閉じた。

「こ…これは」

奈緒は、誰もいないことを知っていたけれど周りを見回し、本当に誰もいないことを確認してから再び雑誌を開いた。

「ひょっとして、春画…というものか？ …少し、想像していたのとは違うが」

顔を上げると、壁じゅうに大きなポスターが貼ってある。

どれもこれも、

——なんで、男どうしで絡まってるんだ？

しかも、上半身裸で。

「まあ…、趣味は人それぞれだしな」

言い訳のようにつぶやくと、明かりを求めてカーテンを開けた。

「っな」

ここは真寄市まよりのほぼ中心に立つ高層マンションの一室だ。かなり上の階にあり、奈緒の部屋からも真寄市全体を見渡せる。奈緒は、そこからの都市の眺めに圧倒され、今、間違いなく、

数百年の眠りから、覚醒した。

「なんじゃこりゃあ!？」

連なる巨大建造物、たぶん牛車の進化したやつ、うじゃうじゃとうごめく人々。

ここ数回、目覚めるたびに世の中がだんだん騒々しく大がかりになってきている、というのは気づいていたけれど、

これはちよつとその度合いが大きすぎる。

——ひょつとして、何千年か寝過ごしたんじゃないだろうか。

奈緒は本気で心配したが、もちろん、こうして世の中が生きているということが、寝過ごしたのではないことを証明している。

「奈緒っ!　いつまで寝てるの!」

「はいっ!」

奈緒の体は、その意志とは関係なく一瞬飛び跳ね、着地と同時に部屋を飛び出し、食卓に向かってダッシュした。

体とは正反対に、奈緒の心は冷静に分析する。

——今の声は母親か。母親の声に対するこの体の反応はそうとう素早かったな。ずいぶんと華奢な体なのでどうかと思ったが…、案外使い勝手が良いかもな。

食卓まで、三秒。かなりの速度で走ったが、足音はほとんど聞こえなかった。これは奈緒が階下の住民に配慮するよう母親に厳しく

言われて育ったからで、今では特に意識しなくても足音を立てない歩き方になっていた。

食卓には、奈緒と母親のぶんの朝食が用意されていた。ホイップしたバターを添えたトーストと、ミルク。白い皿に映える青リングと、細く刻まれたハムを載せたサラダ。

――バターより、マーガリンの方が好きなんだけどな。

奈緒は口をとがらせた。ただし、それは鈴木奈緒本人の嗜好だ。

奈緒は、ちらりちらりと母親を見ながらトーストをかじった。いつものことだが、肉親には何か感づかれるのではないかと心配になる。もっとも、いつもと少し違う行動をとっただけで「ひよつとして中に別の人格が入っているのでは」などと考える者はまずいない。それはわかつているんだけど。

しゃく、とリングを嚙ってみる。じゅうつ、と果汁が口いっぱいに弾けた。さわやかな香りが鼻を抜け、心地良い酸味が舌の奥の方でくるとはしゃいでいる。一段落して残るのは、例えようのない恍惚感に満ちた、強烈な甘み。

「ほむう…」

奈緒の母は、奈緒がいつものようにバターに対する文句を言わないことを不思議に思った。文句どころか、リングを食べてあんなに嬉しそうにしている。いつもは、半分寝ているようにもそもそと食べるだけなのに。

けれど、母はもちろん「どうして今日は、バターは嫌いって言わないの？」などとは言わなかった。代わりに、言いにくそうに、とても言いにくそうに切り出した。

「ねえ奈緒？ 部屋にある雑誌のことだけど…」

ぶふ、と奈緒がミルクを吹き出す。

「いや、あれは」

「あんまり、人に見せられるものじゃないわよね？」

「あれはべつに」

「もうちょっと、女の子らしい雑誌を読んだらどうかなって思うん

だけど」

「――っ」

酷い、酷い屈辱だ。わたしはあんな本、

あんな本、

まあ、少しはその、「おっ？」とか思ったけど。

あんな本、読みたいわけじゃない。ただ目が覚めたら山積みされてたんだ。

「だからね、奈緒ちゃん」

恥ずかしさと悔しさで、奈緒は真っ赤になってうつむいている。

「あの本、捨てちゃっていいかしらね？」

「だっ、」

立ち上がった勢いで、ミルクがこぼれてしまった。

「だめだ、勝手に捨てるな！」

ぎょっ、と母が目丸くした。

「捨てるな…んて、…だめ…だと…、あの、ええと」

「ごめんなさい、奈緒ちゃん。ちょっと試してみただけだから…。気にしないでね」

「うー…」

わたしが体を借りている間に大切な本が捨てられてしまったのは、申し訳ない。

そう思って母親を止めたけど、

――ひょっとして、よけい妙な印象を持たれてしまったかもしれない…。

すまない、鈴木奈緒。本は守ったから、許してくれ。

思わぬ娘の反抗に驚いた母は、溜め息混じりにこぼれたミルクを拭き取った。

「…グズグズしてると遅刻するわよ」

「あ、はい」

奈緒は、急いで朝食を終えると身支度を調えた。

何を着たらいいのか、顔を洗うのに何を使えばいいのか、奈緒に

はさっぱりわからなかったが、

こういうときには、心を無にする。

そうすれば、体が勝手に、普段しているように振る舞ってくれるから。

奈緒は、だんだん他人の体を使うコツが飲み込めてきていた。

家を出ようとする奈緒を、母が引き留めた。

「奈緒？ あなた、ちょっといつもと…感じが違うみたい？」
え。

気づかれた？ どうしよう。早く逃げたほうがいい？ それとも
ごまかしたほうが？

動揺する奈緒を品定めするように、母がゆっくりと奈緒の周りを
回る。奈緒の首筋を冷たい汗が伝う。

やがて奈緒の背中に回った母は、手をぽんと叩いた。

「わかった。リボンがないじゃない」

「リボン…？」

母は奈緒の部屋から赤くて長いリボンを持ってくると、奈緒の髪
を留めているゴムを覆うように結んだ。今どきの流行りじゃない、
そんなことはわかってる。けれど、

奈緒はこのリボンを結ぶと不思議と落ち着いた。

「大切なリボンなんだから…、忘れちゃダメでしょ。じゃ、行って
らっしゃい」

「行ってきます。…お母さん、」

奈緒は母の目を見た。

わたしはこの人を騙している。わたしは奈緒じゃない。だからせ
めて、

この厳しいけれど優しそうな母を、

この母に愛されている奈緒を、
悲しませることがないように。

「行ってきます」

奈緒は、もう一度そう言うと、家を出た。

奈緒がマンションから出てくるのを、その少年はずっと待っていた。

「今日は：ちよつと遅いなあ」

腕時計を見ながらそんなことをつぶやく姿はどうみても待ち伏せだったけれど、彼にしてみれば「そんなつもりはなかったのに偶然ばったり出会うタイミング」を計っていたにすぎない。

何かあったのかな、と顔を上げた瞬間、そこに奈緒がいた。

「あっ、す、鈴木さん、おはおはおは、おはよう」

奈緒は驚いたけれど、少年の名前を、鈴木奈緒本人の記憶から探った。考え事をするときにくちびるに人差し指を当てているのは、鈴木奈緒本人の癖だ。

少年の名は、市村蒼馬^{そうま}。小学校に上がる前からの、いわゆる幼なじみ。

——ならば、笑顔であいさつ、が妥当だろう。

そう考えた奈緒は、それを実行した。

「おはよう、蒼馬くん」

「えっ、あ、うん」

今日も無視されるんだろうな、と悲観的な（そして正確な）予想をしていた蒼馬は、立ち去る奈緒を呆然と見送った。

「今：、笑ったよな、鈴木さん：。僕に向かって、名前を呼んで」

蒼馬は、にへら、とだらしなく顔を崩した。けれど、

「何かの間違いだよな、うん。ありえない」

うん、うん、と頷きながら、蒼馬は奈緒の後を追った。並んで歩くわけでもなく、ただ奈緒の少し後、話しかけても声が届かない程度の距離を保って、ついて行く。

——わたしを待っていたんじゃないのか：？

奈緒は不思議に思ったが、それはかえって好都合だった。探さな

ければならない物が、ある。

蒼馬も不思議に思っていた。奈緒は、普段は蒼馬から逃げようとしてもするように早足で、そして少し寂しげに視線を落とし、まっすぐに学校に向かう。けれど今日の奈緒は、

なにかを探しているのか、きよろきよろとあたりを見ながら歩いている。普通に歩いていると追いついてしまいそうになる。

——何か、落とし物、かな？

蒼馬は迷った。

もし落とし物だしたら、

探すのを手伝うのは、“約束”に含まれる、僕の役目だろうか？

鈴木さんが困っているのだとしたら、手伝うべきだとは思う。

けれど、

鈴木さんのプライベートなことなら、僕にはそこに触れる権利はない。

でも。

「あの…、何か、落とし物？」

奈緒は答えない。

「手伝おう…か？」

——こいつ、うざい。

奈緒の頭に、そんな言葉が、自然に浮かんできた。

意味はよくわからないけれど、たぶんこのいらいらもやもやした気持ちを表す言葉なんだろう。この少年は、なぜだか、わたしをいらつかせる。

けれど一般的に考えて、相手が幼なじみである以上、あまり邪険にもできない。

「ううん、いいの。ありがとう」

奈緒は、きよろきよろと見回すのをやめた。蒼馬に声を掛けられるきっかけを作らなくなかったし、なにより、見渡す限り捜し物は見つかりそうにない。

視線だけを左右に散らしてみる。

道の右側は、建物がびっしり並んでいる。左側は、植え込みを挟んで大きな道があり、車がひっきりなしに走っている。

植え込みの木は小さくて、

——これじゃ役に立たない。

もう少し大きな木、少し太めの枝を持った木はないか。

——それにしても、

と、奈緒はあらためて街を見た。

いよいよ本番を迎えようかという夏の空は、けれど朝から薄汚く淀んでいる。

その空の下で、

うじゃうじゃと、しかも早足でうごめく人々。

ごうごうと、やかましく油くさい煙を吐いて走り去る車。

奈緒は思わず手で口を覆った。

夜の間に濁った空気は、

まるで命が再生するかのように、

朝日によって浄化される。

朝日を浴びて鳥は目覚め、

朝日を浴びて草木は輝き、

朝日を浴びて、

人々はちょうど一日分の活力を、
みな平等に分け与えられる。

——その理は、まるで変わっていないはずだけれど。

空気はさっそく煙に覆われ、

人々は歩いていくうちにすでに疲れ、
誰もが朝日から目をそらすようにうつむいて歩いている。

それでも、

それでも、

わたしは、

この街を、この世を、

——守らなければならない。

奈緒は、少し足を早めた。

第一章（2）

第一章（2）

「まさか、こんなに苦勞するとはな…」

汗だくになって教室に着いた奈緒は、右手に持った枯れ枝を見つめた。通学路をくまなく探しても見つからず、遅刻ぎりぎりで校門に滑り込んだとき、植え込みの中でやっと見つけた枯れ枝だ。

枯れ枝、木ぎれ。そこらへんで簡単に手に入りそうだし、事実、今まではこんなに苦勞したことはなかった。けれど今回は、

汗だくになって、やっと細い枯れ枝を一本、見つけただけだった。窓際の席で、かすかに流れ込む冷たい空気に汗をさらしていると、奈緒は声を掛けられた。鈴木奈緒と仲がいいのだろう、サヨ、という名前がすぐに浮かんできた。

「奈緒、おはよー。今日は遅かったね。…なにそれ？」

「あ、お、おはよう。あー、この枝？ ええとええと」

「…あんた、ほんつとに変わってるよね」

きやらきやらきやら、と笑う。

大丈夫、私は鈴木奈緒。怪しまれることは何もない。

奈緒は、よくしゃべる友人の話に適当に相づちを打ちながら、授業が始まるまでの時を過ごした。

授業が始まると、奈緒はまじめに授業を受けた。授業の内容はよくわからないけれど、あの黒板の内容を、皆がそうしているように、そっくりそのままノートに書き写す。

——こんなので勉強になるのか？

教師は、ただ教科書を読み上げながらびっしりと黒板を埋め尽くす。何を教えるでもなく、要点を書き並べているだけだ。それなら、あらかじめ紙に書いて配ってくればいいのに。

それでも奈緒は、必死にノートを取った。今、授業の内容を覚えただところで、奈緒本体の記憶には残らない。だからせめて、あとで少しでも鈴木奈緒本人の役に立てるように。奈緒は、無断で体を借りている以上、その持ち主になるべく迷惑をかけないようにしようと誓っていた。

「鈴木」

突然、教師から名前を呼ばれて、奈緒の体は軽く飛び上がった。体は勝手に反応したけれど、自分の名前を呼ばれたと頭で理解するまで数秒かかった。

「次の問題。答えは？」

「え、あの、ええと」

黒板に書かれた慣れない文字を書き写すのに精一杯で、いま教科書のどこを開いているのかすらわからない。

「なんだ鈴木、授業聞いてなかったのか」

その通り、と思ったけれど、正直に言っていないものかどうか。

「先生、奈緒はこの時期ダメですよ」

手を挙げてそう言ったのはサヨだ。

「番組改変期だから、アニメの新番組チェックで寝不足なんだと思います」

教室のあちこちから同意の声が聞こえる。おそらく真実なのだろう、笑い声も否定する言葉もなかった。教師は、深いため息をついた。

「もういい、座りなさい。今期は豊作だから仕方ない」

授業が終われば、あちこちにグループができ、楽しく幸せそうな笑い声が響く。

奈緒のところにも数人が集まり、他愛ないおしゃべりが続いた。

左から順に、ヨーコ、サヨ、シィ。

奈緒は、とりあえず名前だけは覚えておくようにした。シィは別のクラスだけれど、休み時間ごとに来てくれる。

ときどきガンザブローという人の名前が出てくるようだが、話の流れからはそれが誰なのかはわからない。落ち着いて記憶を探せば、少なくとも昨日までの鈴木奈緒が知っていることはわかる。しかし、そんな余裕がないくらいに話題が次から次へと変わってしまう。奈緒は口を開くことすらできなかった。

それでも、
楽しい。

奈緒は、こんなに楽しい思いをしたのは初めてだった。

マツリのと看とは違ふ、日常の、幸せと、笑ひ。

「奈緒さ、今日はどうしたの？」

「…っ、え？」

気づくと、三人の目が奈緒に集中している。

奈緒は慌ててその理由を探す。

大丈夫、余計なことは話してないはず。というより、彼女たちの話には口を挟む隙間がなかった。

それなら、どうしてみんなが注目しているのか。奈緒にはその理由がわからない。

「な…、何か…、変、かな？」

「変よ」

「ど…、どこ、が？」

「笑ってる」

「—？」

「あたし、奈緒が笑ってるとこ見たことないよ。少なくとも、…ここ何年かは」

シイの最後の一言が妙に慎重な言い方だったのが気になるけれど、他の子たちも、うなずいている。きつと、真実なのだろう。

笑わない、奈緒。

そう言われると、そう、

今朝、目が覚めたときから感じていたものがある。

心の、割と浅いところにある、触れてはいけない部分。奈緒自身

となった体の借り手にすら、決して触れさせようとしないう部分。おそらくこの子たちは、その部分のことを話している。奈緒が笑わない理由は、そこにある。

「まあ、アレでしょ。新しく始まったアニメが当たりだったとか？」
なんとなく半分バカにされたような気がしたが、奈緒は「まあ、そんなところ」とだけ答えておいた。みんなの溜め息を聞いて、奈緒は、やっぱり半分バカにされていたことを知った。

やがてチャイムと同時に教師が入ってきた。奈緒は教科書とノートを広げ、教師の話を聞き流しながら黒板の文字を書き写す。

けれど、奈緒の意識はそこにはない。

授業の合間に、他愛もないおしゃべりに時間を費やす友人たち。バカにはされていたようだが、それでも怒りは感じない。かえって、バカにされることが少しだけ心地よく感じる。

それがたぶん、

仲がいい、ということなのだろう。

けれど。

奈緒は、窓の外を見る。

密集する家々、それを見下ろす高いビル。

人々の群れの間を、高速で行き交う車。

守れない。

奈緒は、震えた。

この街には、いったい何千、何万の人が住んでいるのだろうか？

災いが起きたとき、わたしは、

この人たちを守れない。

わたしにとっての昨日、大火で大勢の人が死んだ。

今日再び、わたしのせいで、

いったい、いくつの命が奪われるのだろうか？

奈緒は、自然に涙が溢れていることに気づいた。

わたしじゃない。わたしが泣いているんじゃない。

この体が、勝手に、泣いているんだ。

奈緒は、勝手に溢れてくる涙を止めることができなかった。

「と、こうして革命は幕を降ろしたわけだ。ここは必ず試験に…、

おい鈴木、どうした？」

クラス中の視線が奈緒に集まる。

「奈緒…、どうしたの？」

「何かあった？」

「どっか痛い？」

口々に心配してくれる友人たち。

なんでもない、なんでもないとつぶやく奈緒の肩に手を置いてくれる子。

赤の他人のわたしを、自分の友人の姿をしたわたしを、
慰めてくれる優しい子たち。

わたしは、

この子たちを守れない。

ただ、一人でも多く生き残ってくれるように祈るしかない。
切ない。悲しい。情けない。悔しい。

わたしは、

わたしは、

許されることのない罪を、

重く背負っている。

あのとき、自分の力を過信していなければ。

わたしは罪を負わず、

大勢の人が命を失うこともなく、けれど、
そんな空想は、自分へのごまかしでしかない。

毎日、毎日、毎日、

眠って、目覚めるたびに、別の体を借りている。

眠って、目覚めるたびに、世に災いがもたらされる。

眠って、目覚めるたびに、わたしは、

大勢の人が死ぬのを見ている。

わたしの、せいで。

奈緒は、とにかく落ち着くまでと保健室に連れてこられた。保健委員だからという理由だけでなく、心から奈緒を心配してくれる優しい友人に支えられて。

蒼馬は、その姿を見送った。

何度、声をかけようと思っただろう。鈴木さん、大丈夫？ と。

結局、蒼馬は黙って見ているだけだった。

「ダメだよなあ、僕……」

蒼馬の自己評価は、いつも正確だ。これは、彼の長所でもあるの
だけだ。

ずっと泣いているわけにはいかない。

奈緒は、保健室のベッドに突っ伏したまま枕で涙を拭くと、起きあがった。

落ち着いたらそのまま早退できるようにと持ってきてもらったカバンの中から、家から持ってきたカッターナイフを取り出す。枯れ枝も一緒に持ってきてくれるあたり、律儀な友人で助かった。

「こんな小枝じゃ、禍玉まがたまも小さくなってしまふな……」

父親から教わった呪文を小さく唱えながら、枯れ枝から器用に小

さな十二個の球を削りだし、数珠を作り、手首にはめた。

「こんなので：役に立つだろうか？」

本来は首にかけるくらい大きな輪にするものだが、小さな枝しか見つからなかったから仕方がない。奈緒はため息をついた。

続いて、ルーズリーフ数枚を短冊状に切り分け、呪文を書きこんで護符ごふを作る。これも父親から教わったものだ。

紙が手に入りやすいのはありがたかった。けれど、

奈緒は、できあがった護符ごふをつまみ上げ、ひらひらと振った。

「大丈夫…、だよな？」

護符ごふは、薄いパステルカラーのルーズリーフで作られていて色とりどりだ。全体に、デフォルメされたアニメのキャラクターがちりばめられている。

呪文はサインペンで書かれていて、しかも奈緒本人の癖でその文字は丸っこい。それは威厳とか有難みとか神秘的とかいう言葉からは決定的にかけ離れている。少なくとも奈緒は、イラストが入った護符ごふというものを見たことがなかった。

「まあ…、呪文さえ合っていれば大丈夫、とは思うけど…」

二十枚ほどの護符ごふを作り終えると、奈緒はそれをスカートのウェストに挟み込んだ。

「後は待つだけ、か」

奈緒は、何度目になるだろう、口にしてはいけない言葉を、小さく、つぶやいた。

「このまま、何も起きなければいいのに」

自分の罪から逃げることになるから、口にしてはいけない。そう誓ったのに。今日も奈緒は、何も起こらなければいいと、願ってしまった。

横になって天井を見上げていると、ベッドを囲むカーテンの隙間から保健の千木田先生ちぎたが顔を出した。見た目は、若いというより幼い感じがする。顔だけを見れば生徒か、へたをしたらその妹と勘違いしそうだ。白衣を着てるからたぶん保健の先生、と推測できる程

度で、保健室以外で会ったら何者かわからないだろう。

千木田先生は、鈴木奈緒にとっては「関わりのない人」らしい。
ちぎた

奈緒は記憶の中を探ってみたけれど、この先生の名前が出てこなかった。

先生は奈緒の顔を覗き込む。奈緒は、さりげなく視線を外す。先生の目の透明な輝きが、濁りも曇りもない微笑みが、痛い。

「鈴木さん、落ち着いたかなあ？」

「あ、はい、大丈夫です」
うそ。

大丈夫なんかじゃない。わたしを救ってくれる人がいるのなら、すべてを捨ててもすがりつきたいくらい。

「突然泣き出すなんて、どうしたのかなあ？ 何か…あった？」

奈緒には答えることができない。本当のことを言ってもしかたがないし、うその理由も思いつかない。

「まあ、そういうことってあるわよね。先生もね、むかし飼ってた猫のことをたまに思い出して…。ううっ」

そう言って目を潤ませる先生から、奈緒は目をそらした。なんとなくだけれど、この人とは合わない気がする。いきなり猫の話を読まれたって答えようがないし、なにより人を小馬鹿にしているようなω型の口が気に入らない。

「先生、いつでも相談に乗るからね？ それとも…先生じゃ頼りにならないかなあ？」

奈緒は答えられなかった。名前も知らないちんちくりんな保健の先生が頼りにならないのは事実だけれど、

頼りにならないのは、先生だけじゃない。

誰にも頼れない、わたしの苦しみ。

誰にも理解されない、わたしの使命。

誰にも許してもらえない、わたしの、罪。

先生の優しさが辛い。この人も、わたしのせいで死ぬかもしれないのに。

「先生、わたし、もう大丈夫です。ありがとうございました」

奈緒は、先生の顔を見ていることができなくなって、保健室を出た。

「あ、ちょっと、鈴木さん、最後に一つだけ」

立ち止まって振り返った奈緒に、先生は優しく猫を撫でるような声で言った。

「マンガの主人公に恋をするのは、べつにおかしいことじゃないからね。先生にだって経験あるし。先生、鈴木さんの味方だからネ」

ぱ：ぱち、とたどたどしく片目を閉じた先生に、奈緒は「はあ」とだけ答えた。どうもこの鈴木奈緒という少女は、家だけでなく学校でも周囲に妙な印象を持たれているようだ。けれど、それは決定的外れではないのだし、わざわざ否定することもないだろう。

どうせ、わたしはただの通りすがり。この体を返して眠りにつけば、もう二度とこの人たちと関わることはない。

遠ざかる奈緒の足音を聞きながら、先生は鏡の前に立った。そこに写っているのは、だぶだぶの白衣をまとった、ちんちくりんな自分の姿。

「悩み事の相談に乗るのも、私の仕事なんだけどなあ……。やっぱり、見た目がこうだからダメなんだよね。もっとこう、ばいーんと」

胸元に丸めたガーゼを二つ詰めてみる。

「うん、そうそう、これこれ」

腰に手を当てて満足げに頷いている。けれど、もしそこに誰かがいたなら、それが誰であっても否定するだろう。そういう問題じゃない、と。

保健の先生は、その日の仕事が終わるまでガーゼを詰めたままだった。何人かの生徒が保健室を訪れたが、いびつな膨らみを見て誰もがほろりと涙し、心の中で「先生がんばれよ」と励ましたのだった。

奈緒は教室に戻ったけれど、奈緒にとって教室の居心地がいいわけではない。

取り囲まれる奈緒。決して語れない真実。存在自体が、うそ。

奈緒は、先生が授業を再開するまで、大丈夫、大丈夫と嘘をつき続けた。

蒼馬は（いつものように）少し離れたところから、奈緒を心配そうに見ていた。

朝、いつもなら無視されるだけなのに、今日は笑っておはようと言ってくれた。

昔のように、蒼馬と呼んでくれた。

きよろきよろと辺りを見回し、枯れ枝を拾っていた。

楽しげに笑っていたかと思うと、急に泣き出して。

保健室から帰ってきたら、ひどくつらそうな顔で「大丈夫」とうそをついている。

なにか、いつもと違う。

いつもの鈴木さんじゃない。

何かあったんだろうか？

けれど、

奈緒に話しかける勇気を、蒼馬は持っていなかった。

第一章(3)

第一章(3)

結局、何も言い出せないまま一日が終わってしまった。

蒼馬は、朝と同じように奈緒の少し後ろを歩いていた。帰り道が同じ、ということもあるけれど、それ以上の理由がある。

いつもと同じ、けれどいつもと違う奈緒の後ろ姿を見ながら、蒼馬は首をひねった。

今日の鈴木さんは、鈴木さんじゃないみたいだ。

なんて言ったらいいかわからないけれど、

何かが、違う。

それはひょっとしたら、元に戻った、ということかもしれない。

少なくとも今朝の鈴木さんは、以前の、

僕を遠ざける前の、

鈴木さんに、奈緒ちゃんに、近い気がする。

だから蒼馬は、話しかけてみよう、と誓っていた。

学校の塀が途切れると、そこからは公園だ。森と呼べるほどではないが、背の高い木が茂っていて日陰を作っている。もう少しして夏が本番を迎えると、この日陰がとてもありがたく感じられるようになる。

その日陰に、奈緒が足を踏み入れる。こげ茶色の髪が輝きを失い、蒼馬は一瞬奈緒の姿がかき消されてしまったような焦りを感じて声を掛けた。

「あ、あの、鈴木さん」

呼びかけられて、奈緒は振り向いた。笑顔で振り向く前に舌打ちをしたが、それはこの年頃の女の子としては特に珍しいことではない。

奈緒は、ほほえんで小首を傾げ、「なに？」と答えた。本当は無視したいが、鈴木奈緒の人間関係を壊さないようにと配慮しなければならぬ。

何年ぶりかに見る奈緒の笑顔に蒼馬は少し慌ててしまい、だから思っていたことが思わず口から出た。

「あの、今日の鈴木さん、ちょっと変：いつもと違うな、って思ってた」

「朝からずっと、あの、気分が悪かったの」

気分が悪いと言われれば本気で心配してしまうところが、蒼馬の長所であり、短所だ。加えて、女子が気分が悪いと嘘をついているときに機転を効かせてさらりと流せるほどのスキルを、彼はまだ持ち合わせていない。

「大丈夫なの？　ちょっと保健室で休んでいったほうがいいんじゃないの？」

「うん。大丈夫、気にしないで」

奈緒は、少し困ったような笑顔を作ってそう言い残すと、そのまま立ち去ろうとした。

「また笑った：。絶対ヘンだ」

蒼馬がつぶやいた、そのとき。

突然、木々で休んでいた鳥たちが一斉に羽ばたいて蒼馬たちの頭上を抜けて行く。一瞬の間を置いて、ドン、と突き上げるような衝撃があった。

「わ、地震？」

校門の方から聞こえてくる悲鳴に振り返ると、道路が裂け、弾けている。アスファルトの破片をまき散らしながら、亀裂がこちらに走ってくる。まるで目に見えない巨大な剣が道路を切り裂きながらこちらに向かってくるようだ。

見えない剣は何人かの生徒や車をはじき飛ばし、轟音と共にまっすぐこちらに向かってくる。大きな揺れと鼓膜に突き刺さるような衝撃音が蒼馬の足をすくませる。

「うわあああああっ！」

はじき飛ばされる、そう思った瞬間。

何かが、視界を遮った。

それは、鈴木奈緒の姿をした少女。

少女は、一枚の護符ごふを取り出して目の前に放ち、それを空中で支えるように両手のひらを突き出した。その瞬間、

少女の全身が、目に見えない剣の力を受け止める。

どう、という地面が割れる重く低い響きと、

金属同士がぶつかり合うような鋭い響き。

体が押し下げられるような風圧と、飛んでくる小石。

蒼馬は頭を抱え、地面に伏せた。数秒間、耳元で風が渦を巻き、やがて奇妙なほどの静けさが訪れる。

蒼馬が恐る恐る目を開けると、

宙に浮いていた護符ごふが、シャン、と鈴のような音を響かせて粉々に砕けた。

亀裂は、奈緒と蒼馬を避けるように二つに分かれていた。片方はブロック塀を崩して突き抜け、もう片方はずっと先の電柱をなぎ倒して、その先は見えない。

「あ、あ、あ……あ？」

蒼馬が伏せたまま呆けていると、頭上から奈緒の声がした。

「ふん、こんな護符ごふでも使えるものだな」

それは確かに蒼馬が聞き慣れた奈緒の声だけれど、

それは確かに蒼馬が聞いたことのないほど冷たく威圧的な口調だった。

「怪我はないか？」

見上げた蒼馬の目に飛び込んできたのは、鋭く、強い、奈緒の視線。いつもの鈴木奈緒とは違う、殺気を漂わせた目つき。伏せたまま下から見上げているのだから、もちろんスカートの中が見えそうだったけれど、

蒼馬は、奈緒の目から視線を外すことができなかった。

「蒼馬、人目につかないところに案内してくれ」
奈緒は、蒼馬の腕をぐいと引いて立たせた。



公園の茂みの中に、二人はいた。

蒼馬は、虫に刺されたらしい腕をぽりぽりと掻きながら、黙って奈緒を見ている。

もちろん、話したい事はたくさんある。なにせ、今、奈緒の手のひらの上では、数珠が宙に浮き、くるくると回りながら光っているのだから。

けれど、

「少し黙っていてくれ」

鋭い目つき、厳しい口調でそんなふうに言われてしまっっては、黙って見ているしかない。

公園の外では救急車や消防車が行き交い、人々が右往左往している。そんなことには構わず、

奈緒は目を閉じ、何かを念じながら集中している。が、やがて奈緒が長い息を吐くと、同時に数珠は光を失い、手のひらに収まった。

「ダメか。やはりこんな小さな禍玉では、よほど近づかないと反応しないのか…」

奈緒が顔を上げると、蒼馬がじっと自分を見ている。こみ上げてくる言葉をなんとか押さえ込んでいる、という様子だ。奈緒はその様子がおかしくて、少しじらしてから、「もうしゃべっていいぞ」と言った。

蒼馬は、早口でまくしたてた。

「君は、鈴木さんじゃないよね？ 目つきが怖いし、しゃべり方も

変だし、それに」

それに、鈴木さんが僕に笑顔を見せるはずがないんだよなあ。

「それに、なんだ？」

「それに…、その、変な力を持ってる」

奈緒は、悲しそうな顔をした。

変な力、か。確かにそうだ。

「そうだ。わたしは、鈴木奈緒ではない。訳あって、この体を借りている」

蒼馬にはわからなかった。体を借りているということの意味が、ではなく、

何者かが不思議な力を使って鈴木奈緒に乗り移ったのか、それとも単なる鈴木奈緒の妄想なのか、ということが。

ふだんの鈴木奈緒を知っていれば、鈴木奈緒の妄想だという言葉われれば何の疑いもなくうなずくだろう。ただし、光って宙に浮く数珠を見ていなければ、の話だ。

戸惑う蒼馬を見つめ、奈緒は心を決めた。

関わらない方が良かった。けれど、関わってしまったからには、すべて説明する必要がある。

この少女——鈴木奈緒の体を返したあと、支障がないように。これから周囲の者に何か迷惑をかけるかも知れない。常識を外れたことをしたり、言ったりするかも知れない。それは鈴木奈緒のせいではなく、わたしにすべての責任がある、ということをし、説明する必要がある。

——もつとも、鈴木奈緒はもとも変人扱いされているような気もするが…。それはまあ、それとして。

「わたしは、この世に災いを起こす禍物まがものを追ってきた」

「まが…もの…？ 災いって、さっきの地割れみたいなの…？」

蒼馬は、何人もの生徒がはじき飛ばされ、壁や地面にたたきつけられる場面を思い出し、震えた。

「そうだ。禍物まがものを眠らせ、災いから世を守る。それがわたしの、」

わたしの、何だろう。

少女は、言葉に詰まった。

わたしの、罪滅ぼし。そうなんだけれど。奈緒は、それを口にすることができなかった。

「：わたしの、使命だ」

「本当に、きみは：、鈴木さんじゃないの？」

「まがたま禍玉が浮いているのを見ただろう？」

数珠を目の前にぶら下げられて、蒼馬は認めざるを得なかった。

「このまがたま禍玉はな、お前にもわかる言葉で言うと：」

鈴木奈緒本人の癖で、少女は人差し指をくちびるに当てた。くちびるがふわと凹む。蒼馬の心臓がどくと弾む。

「リーダー、だ。まがもの禍物の気配を探ることができる」

奈緒は立ち上がると、独り言のようにつぶやいた。

「わたしはまがもの禍物を探さなければならない。お前は家に帰っておとなしくしている」

「ちょ、ちょっと待ってよ」

蒼馬は立ち去ろうとする奈緒を引き留めようとした。

しかし、奈緒の足を止めたのは蒼馬ではなかった。そこにいたのは、

「シィ：。聞いていたのか」

「何かおかしいと思ってね、後をつけてきたの。あたしに内緒話なんて通用しないわよ」

「聞いていたならわかるだろう。そこをどけ」

押しのけようとする奈緒を、シィは仁王立ちのまま睨みつけた。

「奈緒の体を勝手に借りてる？ そんなことが許されると思うの？ あたしだって借りたことないのに」

「借り：？」

「今すぐ出て行きなさい。奈緒の体を返して」

——シィの言うことはよくわかる。けれど。

「わたしが行かなければ、この世は災いに飲み込まれてしまう。今

はまだ地割れ程度だが、放っておけばどんな災いが起こるかわからない。そうなれば、お前も、この鈴木奈緒も、死ぬ。それでいいのか」

シィはどちらかというときつい目をしている。奈緒は普段は伏し目がちで人と目を合わせようとしなくていいけれど、今はシィに負けなくらい強い視線をシィに向けている。

向かい合う二人に、蒼馬は怯えていた。

この二人…、怖い…。

「まあ、」

奈緒は少し目をそらすように言った。

「鈴木奈緒には、申し訳ないと思う。でもな、わたしは自分の意志でこの体を選んだわけではないし、自分の意志で返すこともできない。わたしにできるのは、」

視線をシィに戻す。ただし、伏し目がちに。

「無事にこの体を返せるように努力する。それだけだ」

「…訳わかんないね、あんたも被害者だって言いたいのか？」

——そうだ、わたしは被害者で、加害者で。

黙っていれば殴り合いが始まりそうな雰囲気だったので、蒼馬は恐る恐る口を開いた。

「あの…、シィ、さん…？」

「馴れ馴れしく呼ぶな！　つかあんた、ひょっとしてあたしの本名知らないんでしょ？」

「ええと確か、きねつき…」

「あたしは餅か？　きのつきがはら紀乃月ヶ原だよ！」

「きき、きのねの…」

「きのつきがはら、だってば！　って待てナオモドキ！」

どさくさに紛れて消えようとしていた奈緒は、ち、と舌打ちした。

「悪いが、お前たちの漫才に付き合っている暇はない」

「あたしらのネタの途中で抜け出すとはいい度胸じゃないの」

「ネタじゃないでしょ」

「蒼馬は黙ってろ！」

「はい…」

蒼馬は一步下がって小さくなる。理不尽だとは思いうけれど。

「とにかくナオモドキ、お前に勝手なことはさせない」

「わからない奴だな。わたしにもどうしようもないんだ」

「ひっぱれば元に戻るんじゃないか？」

「ふん、叩けるものなら叩いてみる！ 鈴木奈緒の顔だぞ、ほら」

「ねえちょっと二人とも」

「くっ…、卑怯だなお前！ モドキのくせに」

「モドキって言うな！ わたしはわたしだ！」

「あの、ほら、ねえ」

「本物じゃなければモドキだ！ モドキモドキモドキ」

「お前だって杵つき餅じゃないか」

「ほらもう、そのくらいにしようよ」

「モドキモドキモドキモドキモドキ！」

「餅餅餅餅餅！」

「ねえ聞いてよ二人とも！！」

柄にもなく大声を上げた蒼馬に、奈緒とシイは思わず視線を向けた。ただしその目は吊り上がったままで、蒼馬はびく、と後ずさる。

「あのさ、」

蒼馬は、遠慮がちに軽く咳払いしてから続けた。

「僕と、ええと…、きね…」

指さす方に、シイがいる。シイは明らかに落胆した様子でその指に応えた。

「…シイでいいよ」

「ゴメン。僕とシイさんで、…ええと…」

指さす方に、奈緒がいる。シイは明らかにバカにした様子でその指に応えた。

「ナオモドキでいいんじゃない？」

「僕とシイさんで、ナオ…モゴモゴ…を手伝うっていうのはどう？」

どっちにしろ、その、マガモノ？をどうにかしないと鈴木さんの体は返してもらえないんだし、無事に返してもらうにはやっぱり手伝いがいたほうがいいんじゃないかな」

一瞬の間を置いて、二つの声が重なる。

「無理だ」

「無理ね」

奈緒は、蒼馬とシィに向かって突きつけるように言い放つ。

「まず第一に、お前たちには禍物まがものを探す術すべがない。第二に、禍物まがものに立ち向かう術がない」

シィが引き継ぐ。

「第三に、市村蒼馬、あんたは運動オンチの意気地なし。第四に、」
ぎん、と奈緒を睨みつける。

「奈緒の体を危険にさらすなんて、あたしが許さない」

沈黙の中で、思いが巡る。

奈緒が行けば、奈緒の体は危険にさらされる。

奈緒が行かなければ、この街は、この世は、滅びてしまう。もちろん、奈緒の姿をした少女の言うことが本当なら、の話だが、学校の前にできた地割れや宙に浮く数珠を見せられては疑う理由はない。もし、

もし本当に、より大きな災いに襲われるのなら、危険にさらされる、だけではすまないかもしれない。

シィも蒼馬も、答えはわかっていた。奈緒は、この少女は、禍物まがものを探しに行かなければならない。だから、

奈緒は、沈黙を破ることなく、去ろうとした。赤いリボンをなびかせ、シィに背中を向ける。その時、

「ナオモドキ！」

シィはいきなり蒼馬の腕を掴んで言い放った。

「あたしらも一緒に行く」
え。

蒼馬は、頭の中がぐるんと回ったような気がした。

「だって、僕たちには無理だってシィさんも」

「あたしに逆らうな！」

「はい…」

「あんたが無茶をしないように見張らせてもらうよ」

シィが奈緒を睨みつける。

「ナオモドキ！ あたしはね、」

ぎり、とシィの奥歯が軋む。シィは小さな声で、すぐそばにいる蒼馬にさえ聞こえないような小さな声で、けれど視線は鋭く奈緒を突き刺し、絞り出すようにつぶやいた。

「あたしは、あんたまで失ってしまうわけにはいかないのよ…」

奈緒は、

シィから目をそらすように、公園を出た。

第一章（4）

第一章（4）

右後ろには、奈緒を睨んでいるシィ。

左後ろには、戸惑いながら奈緒とシィを交互に見る蒼馬。

奈緒は、特にシィに対して、大きなため息をついた。

お前たちを危険にさらしたくない、危険な目に遭わせてはいけな
いから、どうしても一人で禍物まがものを探したい。なのに、

——まあいい。あるていど禍物まがものに近づくまでは、それほど大きな
危険もないだろう。機会を見て姿を消せばいい。

公園から出て振り返ると、ずっと向こう、学校の前の地割れのと
ころに、人だかりができていた。警察も来ているようだけれど、何
ができるわけでもない。

地割れにはじき飛ばされた生徒の友人だろうか、悲痛な叫び声が、
ざわめきを切り裂くように響いている。

「おい、ナオモドキ」

シィのその呼び方には、一切の遠慮がない。大切な友人の体を乗
っ取った者への憎しみがすべてだった。

「その禍物まがものってのは、何なんだ？ あたしの知り合いも、あの地割
れで怪我したかも知れない。あんたが何を追ってるのかくらい、知
る権利はあるわよね」

蒼馬はその冷たい口調が自分に向けられたものでないことに心か
ら感謝した。それでも、

——災い、か。シィさんと関わったことも、僕にとっては災いか
もな…。

ちらと奈緒を見ると、固く口を結んでいる。けれどそれは、シィ
の問いかけを無視しているのではなくて、

——シイには知る権利があり、わたしには話す義務がある。

それはわかっていているけれど、

自分の罪を他人に話すのは、とても勇気がいることだ。しかも、決して小さな罪ではない。

つらそうに思い悩む姿は鈴木奈緒そのものだ。蒼馬はその横顔を見ていられなくて、口を挟んだ。

「ねえ、キミ」

「ナオモドキ」

シイがすかさず訂正する。

「その…、ナオ…モゴモゴ…」

ニヤ、と奈緒を見るシイに、奈緒は不満げに唸った。けれどすぐに、

「蒼馬クン、」

少し鼻にかかった声で、

「わたしの意識は、今、鈴木奈緒と同調してるの。だから…」

「おいちよっと待てナオモドキ、それは反則だ！」

「だから蒼馬クン、わたしのこと、ナオ、って呼んで欲しいナ」

最後の「ナ」で勝負はついてしまった。蒼馬の顔は瞬時に真っ赤になって、目尻はだらしなく下がり、口はだらしなく開き、両腕はだらしなくぶらさがり、つまりは全身がもうだらしなくにやけている。

「ばかお前、騙されるな、ああもう男ってこれだから」

「ナ…ナオ」

「なあに蒼馬クン」

今度はナオがニヤリとシイを見る。シイは頭を抱えて「ああもうああもう」と叫びながら地団駄を踏んでいる。

「ナオ」

「蒼馬クン」

「ナオ」

「…蒼馬クン」

「ナオ〜♪」

「…もういいだろ。何か聞きたいことがあるんじゃないのか」

「ええと…なんだっけ」

ナオとシィは同時に肩をすくめた。少なくとも蒼馬に対する評価については、この二人の意見は一致しているようだ。

「ええと。ああそうだ、ナオ…はさ、まがもの禍物を追って来たって言ったけど、どこから来たの？」

「まがもの禍物は、時の流れに身を隠しながら逃げている。わたしはそれを追ってきた」

「つまり…、過去から来た、ってこと？」

「そういうことだ。まがもの禍物は、数百年ごとに世に現れては災いを引き起こす。地震とか、大火とか」

「ふーん。関東大震災とか？」

「ちょっと待て、ええと」

ナオは、記憶をたどった。鈴木奈緒の記憶は雑然としていて、今まで借りた体とくらべて、とても引き出しにくい。鈴木奈緒が記憶下手なのか、そもそもこの時代は記憶すべき事が多すぎるのか。

「関東大震災か、あれは違う。ただの自然現象だ。前回、まがもの禍物が現れたのは、ええと」

ナオが考えこむたびに、蒼馬の胸は心臓をきゅっと握られたように痛んだ。

指をくちびるに当てるしぐさ、

指が軽く触れただけでふわりと凹むくちびる。

蒼馬は、ぼう、と見とれていた。

僕は、

そうだ、鈴木さんが好きなんだっけ。

笑わなくなってしまうたけれど、誰とでも仲良くできて。

——あたりまえだけど、僕とは口もきかない。

長い髪と、赤いリボンと、

ああ、また一つ、好きなところができた。
柔らかそうな、くちびる。

僕は、

そうだ、鈴木さんが

ナオが、鈴木奈緒の奥の方にあつた記憶にたどり着いた。

「これだ。振袖火事」

「……へ？ 火事？ 何が？」

ナオとシィは、蒼馬をまじまじと見た。そしてお互いに顔を見合
わせ、無言で「こいつ、大丈夫か？」と首をひねった。

「何がって…、前回の、まがもの禍物」

「あっ、ああ、そうか、そうだね。ゴメン。振袖火事。うん。江戸
時代だっけ。十万人くらいの死者が出たっていう」

十万人の死者。

鈴木奈緒の記憶には、その数字はなかった。だからナオは、今初
めて、それを知った。

「十万人…。そんなに死んだのか」

「昔のことだから、正確な記録じゃないよ。だいぶ大げさに言われ
てるんじゃないかな」

蒼馬はナオの表情を見て、慌てて取り繕った。けれどシィは決し
て気を遣わない。

「そうか、あの火事、ナオモドキの仕業だったのか」

「違う！ まがもの禍物の仕業だ！ わたしはその_{まがもの}禍物を追って、災いを食
い止めるの！」

——わたしの仕業。

違う、わたしは、

——わたしの仕業。

違う、違う、違う、けれど、

そうだ、わたしのせい。

わたしのせいで、十万もの人が。

「じゃあ、ナオが禍物まがものを退治するんだ？」

優しい口調の蒼馬の言葉に、ナオはうつむいた。

「：護符ごふを貼って、封印できればいいんだけど…。わたしの力では、一時的に眠らせることしかできない。禍物まがものを眠らせたなら、わたしも眠って：数百年後に禍物まがものと共に目覚め、また眠る。その繰り返し」

「やっつけちゃえばいいのに」
禍物まがものをやっつけちゃえばいい。

正論だ。すべての禍物まがものを封印すれば、二度と災いは起きない。
正論だけれど。

「もう何体かは封印した。でも、」
悔しそうに歯噛みをする。

「すべては封印しきれず、何度か同じ禍物まがものと闘っている。――わたしの力が足りないんだ」

遠くから近くから、常に地割れのできる音が聞こえる。けたたましいサイレンに混じって、ときどき爆発音も聞こえてくる。

――安全な場所などない。なるべく禍物まがものから離れる以外は。しかし、禍物まがものがどこにいるか、今のところは見当もつかない。

「なあナオモドキ」
少し気を遣ったようなシイの口調は、蒼馬にはかえって不気味だった。

「その禍物まがものってやつを全部封印したら、お前はどうなる？」

「全部と言っても、何体いるのかわからない。仮に全部封印したとして、」

下唇を噛む。

「：その後どうなるのかは、わからない。追う相手がいなくなれば、永遠に目覚めないのかもしれない。どちらにしろ、お前には関係のない話だ」

「まあ、あたしとしては奈緒の体を返してくれればそれでいいんだけど。ナオモドキが寝ようが起きようがどこへ行こうが、知ったことじゃないしね。でも…」

「でも、なんだ」

「帰りたいんじゃないの？ もとの世界っていうか、もとの時代へ——もとの時代。わたしの体。父上と、村の人々と。」

けれどわたしは、

決して戻れないことを、

決して戻ることが許されないことを、知っている。それでも、

「：故郷に帰りたくない者がいるか！」

「ふーん。つまり、ナオモドキはアレか」

「アレってなんだ」

「ホームシック。おうちにかえりたいよう、ってやつ」

「そんなじゃない」

ぎん、とナオの視線がシイを突き刺す。けれどシイも、それに負けないくらいの眼光を返す。ついでに、びし、とナオを指さし、

「帰りたいんでしょ？ 帰れないんでしょ？ でも帰りたいんでしょ？」

それを、

人差し指を、ナオの眉間に触れるくらいに突きつけて、

「ホームシック、って言うのよ」

蒼馬は決死の覚悟で二人の間に割って入った。

「ま：まあまあ、落ち着いて」

「シイ、もう一度言ってみろ！」

「ナオモドキはホームシックですうー」

「お前っ！」

「まあまあまあまあ、まあ、ね、ケンカはやめましょう。ね。仲良くしようよ、ね」

「ふざけるなっ！」

「仲良くなんてできるか！」

「だいたいお前のその日和見主義なところが気に入らないんだよ！」

「そうだ、どっちつかずの優柔不断め！」

「自分は関係ありません、みたいな顔しやがって！」

「なーにが仲良くしようだ！ いいかげんにしろ！」

「え…？ ひょっとして、僕、怒られてる…？」

「お前以外に誰がいる！」

ナオもシィも、お互いに興奮し始めたことをまずいと感じていたから、その感情を収めるのは簡単だった。ただし、その矛先を蒼馬に向けて、というやり方でだ。

蒼馬は背中を丸め、悲しそうな笑顔を浮かべた。

——いいんだ。僕一人が悪者にされて済むなら、それでいいんだ。さすがに蒼馬に申し訳ないと思ったのか、ナオとシィは並んで歩き始めた。

「で、ナオモドキ、どこに向かってるんだ？」

「さあな」

ナオとしては、どこに向かおうと関係なかった。二人の前から姿を消すタイミングを探していただけだから。

少し広い通りに出ると、街にいつもと変わった様子はなかった。

太陽はいつまでも強く大きく輝いていて、夕方、というにはまだ早いと感じられた。それでも日射しはまばたきをすることに勢いを弱めてゆく気がする。軽く湿気を帯びた風は、吹き抜けることにほんの少しずつ涼しい空気を残していつてくれた。

静かにゆっくりと忍び寄る夜の気配に気づくこともなく、あたりには誰の物ともわからない笑い声が響いている。対照的に、バスを待つ人々は無言で列を成している。それはたぶん、おとといも昨日も、本当なら明日もあさっても、変わらないはずの街の姿だった。

ナオは、あたりを見回した。悲しげな、寂しげな、そして少しだけ苛立ちを含ませた眼差しで。

「…のんきなものだな、いつ災いに襲われるかわからないというのに」

「ナオモドキだって、いつ禍物まがものが来るかわからないんだろう？」

「それはそうだが…。心構えというか、そういう問題だ」

むう、と腕を組んでくれるナオを、蒼馬は少し離れて見ている。こういう表情も可愛いんだよね、と目尻を下げた蒼馬の顔はかなり

だらしないけれど、本人は気づいているかどうか。

シイは、そんな蒼馬を見て、少し意地悪な言い方をした。

「心構えができてても、封印できないんじゃないよな」

「そういうことを言ってるんじゃない。危険が迫っていることに気づいているかどうかとか、そういう…」

「じゃあみんなに教えてやったらどうだ？ その郵便ポストの上に立ってだな、皆の者、聞くんがいい…とか」

「シイ、お前、ひょっとして」

「なんだ」

「わたしをバカにしてないか？」

シイは黙ってナオを見つめたあと、ニヤ、と笑った。肯定の意味だ。ナオは、むす、と口を尖らせた。

「暑いな。アイスでも食うか」

そう言ってシイが指さした先には、行列がある。行列をたどると、小さなアイスクリーム屋があった。店の看板には、「G A N Z A B U R O H」と書いてある。ナオは、教室での会話を思い出した。

「ああ、これがガンザブロウか。アイス屋の名前とは思わなかった」

「店の親父の名前だったさ。名前はアレだけど、うまいぞ。だから蒼馬、おごってくれ」

「…へっ？」

いきなりシイに呼びかけられて、蒼馬の声は裏返った。

「な…何でシイさんにおごんなきゃならないんだよ」

「あたしがアイスを食べたいからだ。おい、ナオモドキ」

「わたしは財布持ってないぞ。カバンの中に入ってなかった」

「そうじゃない。お前も食べたいだろ？ アイス」

「ん…」

ナオはアイスの味を思い出そうとして、くちびるに指を当てる。

蒼馬の視線が吸い寄せられる。

「アイスか…」

甘くて冷たくておいしい、ということしか浮かばない。味を思い

出すというのはなかなか難しいものだ。

くちびるに指を当てたまま、無意識に首をかしげる。

その仕草に蒼馬は、心の中で「うおっ！」と叫んだ。その叫びは口からも小さく漏れてしまつて、その声をシイが聞き逃すはずはない。すかさずナオに耳打ちする。ナオは小さく頷くと、蒼馬に向いた。

「蒼馬クウン、」

鼻にかかった甘えた声で、

「わたし…」

小首を傾げて、両腕を背中に回して、もじもじと視線を落として、
「アイス食べたいナア」

上目遣いに、蒼馬にねだる。

その瞬間蒼馬は、でろりと顔をくずし、すばやくアイス屋の列に並んだ。遠目に見てもだらしない表情で、はやくはやく、と手招きしている。

「ナオモドキ…、おまえ、やりすぎじゃないか？」

「そうか？　そうでもないと思うけど」

蒼馬は、にやけ顔で大きく手招きしている。通行人は振り返り、列に並んでいた人も少し距離を置く。

「…やりすぎだよ」

「…そうだな」

あの変人の連れだと思われるのは嫌だけれど、アイスのためだ、と自分に強く言い聞かせて二人は蒼馬の後ろに並んだ。

第一章(5)

第一章(5)

「ずいぶん種類があるんだな。どれを選んだらいいのか…」

「あたしは、ナッティ・クリーミィとベリーフレンズ、それから定番のバナラだな。もちろんワッフルコーンで」

「はいよ」

店の雰囲気になじみない、頑固そうな親父が三つのアイスを器用に積み重ねる。それは、少し溶けてもバランスを崩さない、絶妙な盛りつけだ。

「おいなんだ、一つじゃないのか、いくつでもいいのか」

「ああ、いくつでもいいんだ。なんたって、」

シィは、ちら、と蒼馬を見る。

「蒼馬のおごりだからな」

「そ…そうか」

「そうかじゃないよ…」

蒼馬は、ちら、と財布を覗く。

「おい、あの緑のはなんだ。どんな味だ」

「ミンティ・ミンティか。甘いけどスーツとする」

「こっちは？ ええと、スウェット・スーツ」

「…スウィート・ルーツな。サトウキビの素朴な甘さが旨い」

「ナオ、よだれよだれ」

「じゅる。このつぶつぶのは？」

「ビター・ビット？ それあたしは好きだよ。バナラアイスがベースで、赤とか黄色のつぶつぶはいろんなフルーツ、黒い粒はチョコ。このチョコは苦いぞ」

「苦いのはいやだな」

「ところが、だ。苦いチョコのつぶつぶが、アイスの冷たさで麻痺した舌を生き返らせてくれる。そうするとどうなると思う？」

「ナオ、よだれよだれ」

「じゅる」

「次の瞬間にだな、」

「じゅる」

「忘れかけていた強烈な甘さが、口いっぱいに蘇るんだ。口の両はしがキューンと痛くなって、溶けたアイスが体の芯に冷たく染みこんでいく。それと同時にいろんなフルーツの香りが鼻を突き抜けて、バニラの甘い香りがそれを追いかける」

「ナオ…、ああもう、大変なことに」

「じゅる。ごく。じゅる。じゃ、じゃあ、どれがいいかな」

「選んでやろうか？ あたしのとかぶらないのがいいな。あたしの味見させてやるよ」

「た…頼む」

「お金出すのは僕なんだけど…」

「じゃあ、最初にシンプルなスウィート・ルーツ、次にオレンジ・サンライズ。ビター・ビットで引き締めて、ゴーヤー・アタック、ハニー・ハニー・ハニーで締めよう。ガンさん、リバーズでワッフルコーンね」

親父の眉がぴくりと動く。

「五個か…。五個積むのは三年ぶりだな」

「ダメ？」

「べらぼうめ、五個でも十個でも積んでやらあな、見てな！」

ひよいひよいひよいひよいひよい、とアイスを積み重ねる。素早い動作の中で、しかもスクレーパーを一種類ずつ交換することは決して忘れない。

「どうだ！」

「ふわあ…」

「ナオ、よだれよだれ」



「なあ、ナオモドキ」

「♪？」

「…うまいか？」

「♪～！」

「…そうか。ところで、まだ詳しい話を聞いてないんだが」
ぎろ、とナオがシィを睨む。けれど、その目は三段重ねの「へ」
の字になっていて迫力のかけらもない。

「どうしてお前が、その、禍物まがものとかいうやつを追いかけることにな
った？」

「何度も言っているだろう。お前には関係ない。…ところでその紫
のやつ、少しくれ」

「奈緒の体を勝手に使っておいて、関係ない、はないだろう。…こ
の果肉がかたまつてるとこ、舐めてみな」

「わたしはおまえのたを思つて言ってるんだ。…んむふ、果物
が生きてるみたいだな」

「話を聞いてどうするかはあたしが決める。とりあえず話せ。…お
い、オレンジサンライズ、全部食べるなよ。少し舐めさせろ」

「しつこいな。話さないと云つたら…あ、わたしはそんなにたくさ
ん舐めてないぞ」

「おごつてもらつた分際で何を言ってる。あ、バカお前、下のから
舐めたら倒れるだろう」

「じゃあ上のも舐めてバランスをとろう」

「あつこら、じゃあお前のももらうぞ」

いちばん安いソルティ・ピアニシモをちびちびと舐めながら、蒼
馬は首を捻っていた。

蒼馬には、どうしても理解できないことがあった。

それは、仲が悪いと思っていた二人が、それぞれのアイスを舐めあっていること。ただし、「女の子とはそういうものだ」と思えば納得できなくもない。

もう一つ、蒼馬がおごったということを感じているかどうかも気になったが、それはどうもすっかり忘れられてしまっているようだから諦めた。

——まあ、あれだけ楽しんでくれれば、おごった甲斐がある……よね？

蒼馬には、ソルティ・ピアニシモの甘さの中に隠された塩味が、少しだけ強く感じた。

「蒼馬、お前のはなんだ」

シイのアイスを一通り味わって、ナオの矛先は蒼馬に向かった。

「これ？ ソルティ・ピアニシモだよ。塩が入ってて、しょっぱいんだ。僕は甘いのがちょっと苦手だから」

「塩……？ アイスにか？ どれ」

ナオは怪訝な表情で少しだけ舐めてみる。

「あつ、ちよつ」

「ん、これは……。なるほど、さっぱりしててうまいな」

「あたしも食べたことないんだよな。ちよつと舐めさせてよ」

「え、シイさんまで」

舌でアイスをすくい取る感覚が、コーンを通して手に伝わる。それはまるで自分の指が舐められているような、そんな錯覚を蒼馬にもたらす。

「なななんだよ二人とも、そんな、ぼぼ、僕のアイスを」

「わかってるって。わたしの舐めていいぞ」

「あたしのもやるよ」

目の前に突き出された二本のアイスを交互に見て、蒼馬は思った。

——ひよつとして、

ナオのアイスに顔を近づける。

——ひょっとして、これが僕の人生の絶頂期なんじゃないだろうか…。

アイスは溶けかかっているけれど、ナオの舌が通った跡ははっきりとわかる。その部分をなるべく意識しないように、おずおずと舌を突きだしてそつとアイスの表面を撫でる。緊張で味はよくわからないけれど、冷たさだけは伝わってきた。

「うまいか？」

「あ、う、うん。チョコ、美味しいね」

「ベルギー産のを使ってるらしいよ。ほら、次はバニラ」

シイの手に包まれたワッフルコーンは、上の方が囙られている。

そのふちの部分はアイ스에触れていないのにしつとりと濡れていて、

——ああ、これ、シイさんが囙ったんだよね…。

さらに蒼馬の緊張を誘う。

尖らせた舌の先で、アイスをちよんとつつく。その冷たさに、びく、と一瞬舌を引っ込めて、もう一度ゆっくりとアイ스에舌を伸ばす。とろりと流れ落ちようとするアイスを今度は平らにした舌でやさしく舐め上げた。いったん口を離し、くちびるについたアイスをぺろりと舐め取ると、今度は口をすばませてアイスの先端を吸った。

「お前——」

顔を上げると、シイが顔をしかめていた。その横にはナオもいて、同じような表情で蒼馬を見ている。

「お前、イヤラシイ舐めかたするなあ…」

「え、いや決してそんなつもりは」

あたふたと言い訳をする蒼馬を気にすることもなく、ナオとシイは自分のアイスを舐めはじめた。お互いに一通り味見して気が済んだ、というところだろう。

いったん落ち着くと、三人は黙り込んだ。はしゃいでいるときはいいけれど、きっかけを失ってしまうと話すこともなくなってしまう。ナオは、ひとりごとのようにつぶやいた。

「わたしはこの体を傷つけないようにするのが精一杯だ。…お前た

ちまで守ることはできない。守ってもらわなくてもいいと言うかもしれないが、んぎゅむわっ！」

「あん？」

「おいシィ！」

「：アイスがか？ そりゃよかったな」

「そうじゃない、おい、シィ！ なんだこの苦いのは！」

ナオは緑色に染まった舌をべろんと見せた。

「ゴーヤー・アタック。ニガウリの苦みをそのまま活かした逸品だな」

「今まで甘かったのに、台無しじゃないか！」

「まあそういうな。そこで、次のハニー・ハニー・ハニーを舐めてみろ」

半信半疑、というより、九割がた疑いの目をシィに向けながら、恐る恐る舐めてみる。

ぺろ。

瞬間、ナオの目が大きく見開かれる。

——こ、

ぺろ。

——これは、

「ふ、深い！ これは深いな！」

「ゴーヤーとハチミツの組合せ、奇跡のコラボだ。いいだろう？」
ぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろ。

夢中になって舐めている。

「：あの子も好きだったのよね」

ぼそ、というシィの小さな声は、思わず口から出てしまったものだろう。そして素早く目をそらしたシィの仕草は、決してその言葉の意味を聞いてほしくないのだろう、と受け取れた。だから、

蒼馬は聞こえなかったふりをして、ナオは一瞬舐めるのを止めただけだった。

第二章（1）

第二章（1）

アイスをすべて食べ尽くしてしまうと、ナオは指に垂れたアイスを舐め始めた。行儀がいいとは言えないけれど、名残惜しそうに指の間まで舐めるナオの姿は、蒼馬に言わせれば“お宝映像”だ。

様々な角度から念入りに手を見つめ、アイスをすべて舐めとってしまったことを確認すると、ナオは一度だけガンザブロウを振り返った。けれどすぐに、すべてを断ち切る決意で紺色に染まりつつある空を見上げて、ふう、と大きく息を吐いた。

三人とも気づかないふりをしていたけれど、さっきから何度も小さな振動が伝わってきている。最初は思い出したように揺れるだけだったけれど、その間隔は確かに短くなっていて、だんだん近づいてきているような気もする。辺りの様子も少しずつ緊迫感を持ち始めていて、携帯電話の小さな画面を何人かで囲んでいる姿も目立つようになってきた。

ナオは、数枚の護符（しふ）を取り出した。

「そろそろ、お別れだな」

言い終わったかどうかというところで、三人の背後のビルの壁が弾けた。地を裂く見えない剣が壁を突き抜け、ナオの脇をかすめる。ナオは護符（しふ）を構えていたが、ぎりぎりのところで使わずにすんだ。けれど、その先で何人かの人のはじき飛ばされ、悲鳴が響く。

「シィ、蒼馬、なるべく道の真ん中に行け！ 壁を突き抜けてきたら避けられないぞ」

「ナオ、あっちに行けばもっと大きい通りに出るよ。そっちの方が安全じゃない？」

答えるよりも早く、ナオは走り出した。大きな揺れが、三人の足

をすくう。振動は地割れを生み、コンクリートのかげらやガラスの破片が降る。

信号の消えた大きな交差点まで来ると、

通りに沿って、大きな地割れが走っていた。それは稲妻のように枝分かれしながら左右のビルを突き崩し、何台もの車をひっくり返してしまっている。ビルが道路に倒れ込みそうなほど傾き、真っ黒い煙があちこちから立ち上っている。

身動きの取れなくなった車の列を縫うように、人々が右往左往していた。少しずつ伸びる影は夜の訪れを知らせてくれるはずだけれど、たくさんの人に踏み消されてしまっただけで誰も気づくことはない。

「これは…、大地震の後みたいじゃないか。街がこんなになるなんて」

「ナオモドキ、禍物^{まがもの}ってやつはこの近くにいますか？」

「いや、禍物^{まがもの}が暴れているというよりも、どこか離れた所から狙っている感じだな。音が遠ざかっているだろう？ この世に姿を現した禍物^{まがもの}は、こんなに早くは動けない。とにかく、」

ナオは護符^{ごふ}を一枚ずつ、蒼馬とシィに手渡した。

「お前達は禍物^{まがもの}の狙いがここから離れているうちに逃げろ。もし何かあっても、護符^{ごふ}を握りしめていれば助かるだろう。…わたしも闘いに備えなければならぬから、一枚ずつしか渡せないが…」

「おい、これ、…護符^{ごふ}？　なのか？」

「…そうだ」

「ナオ、なんか…、イラストが入ってるけど」

「…うん」

「ノートの切れ端だよな？」

「…ああ」

「今やってる深夜アニメのグッズだよな？」

「ちょうど手元にあったから…。なんでもいいだろう、ちゃんと効くんだから」

シィと蒼馬が顔を見合わせる。けれど、ナオの微妙な――恥ずか

しさを必死で抑え込んで睨みつけるような表情に免じて、それ以上は何も言わなかった。

「ほら、早く行け。またいつここが狙われるか、わからない」

あたりは逃げまどう人々で大変な騒ぎになっている。けれど、蒼馬はなんとかナオと一緒にいるための口実を探していた。

「ナオ、どこかでテレビ見てみようよ。禍物まがものの居場所とか、何か、わかるかも」

「テレビ？ 何を言っている。この時間にはアニメはやってないはずだ。アニメ以外にテレビの存在価値はない。そうだろう？」

ナオ自身はテレビを知らない。つまりナオのテレビに対する評価は、鈴木奈緒の記憶によるものだ。シィは、恐る恐る聞いてみた。

「…それ、奈緒がそう思ってる、ってことか？」

「ん？ 間違ってるのか？」

「いや、べつに…」

その時、人々の叫びやクラクションの嵐に紛れて、遠くからチャイム音が聞こえてきた。

『真寄市全域に、避難命令が発令されました。市民の皆様は、速やかに退去を——』

それは、生まれて初めて聞いた、真寄市全体に響く防災無線。

スピーカーからの声は、あちこちに反響してとても聞きづらい。

けれど、緊迫した雰囲気、避難命令という言葉は、はっきりと聞き取れた。

あたりのパニックは、防災無線によって、より激しくなった。急いで家に帰る者、一足先に避難する者、親とはぐれた子、子を見失った親。

「蒼馬、シィ。避難命令だそうだ。お前たちは早く逃げろ。家族も心配しているだろう」

「最後までつきあうよ」

そう言ってナオのそばを離れようとしないう蒼馬に、けれどナオは冷たく突き刺した。

「お前はなにを期待してる？ わたしのそばにすることで満足か？ 鈴木奈緒の姿をしているわたしのそばにいて、名前を呼び捨てにして、一緒にアイスを食べて、」

鼻で笑うように。

「鈴木奈緒と仲良くなったような気分を味わって、嬉しいか？」

蒼馬は目を見開いた。ナオの突然の冷たい言葉に対する驚きか、見透かされた驚きか、

あるいはその両方か。

「そ…そんなじゃないよ。僕はただ」

「残念だったな」

ナオは、蒼馬の言葉を聞くつもりはない。

「わたしが体を借りている間の記憶は、鈴木奈緒には残らない。仮にお前が助けてくれたとしても、鈴木奈緒がお前に感謝することなどない。それに、」

蒼馬はただ、小さく首を横に降り続けている。

「教えてやろうか？ 鈴木奈緒が惚れているのはな、同じクラスの鷹ノ瀬という男だ」

「な」

蒼馬がやっと、小さく声を出した。同時に、シイがぴくりと眉をつり上げる。

「お前には、今のところまったく見込みがないってことだ」

「…どうしてだよ」

「どうしてって、そんなことはあとで本人に聞いてみればいい」

「そうじゃない！」

蒼馬はナオに詰め寄った。

「どうしてそんなことするんだ！僕は、鈴木さんに、」

——恨まれて、憎まれて、

「鈴木さんに嫌われてる。そんなことは知ってるよ！僕が言ってるのは、どうして心の中を覗くようなまねをするのかってことだよ！」

蒼馬はナオを睨みつける。もしナオが男だったら、間違いなくつかみかかっているくらいの勢いだ。けれど、目には涙がにじんでいる。現実を突きつけられて悲しくて、奈緒の心が覗かれたことが悔しくて。

「ナオが鈴木さんの体を借りてるってのはわかった。それがナオの意志じゃないってことも、信じるよ。でも、でも、鈴木さんの気持ちを覗いてばらすなんて酷いじゃないか！ そんなことする権利はないだろ！ 僕は、」

ナオは蒼馬の勢いを受け流すように、体ごと横を向いて視線をそらす。蒼馬はしばらくの間小刻みに震えていたけれど、涙がこぼれる直前に、走り去ってしまった。シイは呼び止めたけれど、蒼馬の耳には届かなかった。

「…おい、ナオモドキ。いくらなんでも言い過ぎだろう」

「ふん。お前は どうする？ まだわたしについてくるか？ それとも、もっと酷いことを言ってやろうか？」

「どうしてそこまでして追い払おうとする？ あたしたちが邪魔なのはわかるけど」

遠くの爆発音がこだまする。少し遅れて、地面が震える。

「邪魔だから、だけじゃない。これはわたしが一人でやらなければならぬことなんだ。お前たちを巻き込むわけにはいかないんだ。わたしの…、」

数秒間、ナオが言葉を詰まらせる。シイは黙って待つ。

「…なんでもない。とにかく、お前には関係のない話だ。だからお前は逃げろ、危険だ。この体は必ず無事に返す。約束する」

シイはしばらく下唇をかねていたけれど、何も言わず、ナオに背を向けた。驚くほど細い背中からは、ふだんの威勢の良さは想像もできない。ナオはその背中が少しだけ寂しげに見えて、だから思わず声をかけた。

「鈴木奈緒はお前の親友だったな」

「…そうよ。大切な…、親友」

「じゃあ、言っておこう。わたしは鈴木奈緒の心を覗いたりはいない。好きとか嫌いとか、そういうのは、心の深いところから自然にわき出てくるものだ。押さえようとしても押さえられないし、わざわざ覗かなくても自然にわかる」

シィはもちろん、人の心を覗いたことなどない。それでも、なんとなくだけれど、ナオの言うことが本当なのだろうということはわかった。

「なるほどね。…安心したよ。奈緒が裸にされたような気がして、あたしも正直腹が立ってたんだ。奈緒を最初に脱がすのはあたしだって決めてたから」

「脱が…？」

「じゃあな。あたしは蒼馬のところに行ってみるよ。ナオモドキが今言ったこと、伝えてやりたいしね」

「だったらついでに教えてやってくれ。鈴木奈緒は、蒼馬を嫌ったりはしていない」

「…言っても信じないよ、きつとね」

シィが意味ありげな表情でじっとナオを見る。いや、

見ているのはナオではなくて、その奥で眠っている鈴木奈緒。

その眼差しの理由は、きっと鈴木奈緒にならわかるのだろう。ナオはそれが気になったけれど、頭を振ってすぐに振り払った。蒼馬の言うとおり、

——わたしに、鈴木奈緒の心を覗く権利はない。

目を伏せるナオに背を向け、シィはわざと少し大きな声で言った。

「奈緒が好きな鷹ノ瀬って男はな、」

「うん？」

「あたしも蒼馬も知ってる奴だよ。…アニメの登場人物だ」

「な…、そうなのか」

蒼馬に対する後ろめたい気持ち少しだけ薄らいで、ナオは安心したような、けれどがっかりしたような複雑な表情を浮かべた。

「でもな、シィ。…鈴木奈緒は、本気で惚れてるぞ」

数秒の間において、二つのため息が重なった。

走り去るシイの背中を見送ることなく、ナオはパニックに陥った人々が逃げまどう大通りを見回した。

「どこか、見通しが良くて人目につかない場所は…」

そんな都合の良い場所は、これだけ人が多くては見つかるはずもない。ナオはあてもなく走り出した。直後、響いた悲鳴に振り向くと、ナオの背後で傾いていたビルが倒れ、完全に道を塞いでしまった。

「えり好みしている場合ではないな」

ナオはその場で^{まがたま}禍玉を手に取り、念を込めた。^{まがたま}禍玉が光り、手のひらに浮く。が、

「ふぎゃっ！」

人の波がナオに押し寄せ、ナオは突き飛ばされてしまった。

「痛っ…」

立ち上がるうとして、気づいた。^{まがたま}禍玉が、ない。

慌てて見回すと、^{まがたま}禍玉は地面に落ち、逃げる人々が何度となく踏みつけている。蹴り飛ばされ、少しずつナオの元を離れて行く。

「ちよっ、待て！　こら、蹴るな！　踏むなってば！」

ナオは慌てて^{まがたま}禍玉を追ひ、手を伸ばした。^{まがたま}禍玉を掴んだ瞬間、「痛っ！」

右手が踏まれてしまった。ナオは^{まがたま}禍玉と痛んだ右手をかばいながら、人の流れから抜け出た。

骨は折れていないようだけれど、親指が腫れている。脈拍に合わせ、ずくん、ずくんと痛む。

——さっそく怪我してしまった…。

真っ先に思い浮かんだのは、怒り狂っているシイだった。無事に返すと約束したのに、と真っ赤な顔でナオに迫っている。

くす、とナオは笑った。

わたしは、

蒼馬とシィを追ひ払って、それなのに、

もうあの二人が恋しいのか？

ナオは放置された車の屋根に飛び乗った。ここなら誰かにぶつかる心配もない。多少目立つかもしれないが、それを気に止めている余裕は、誰にもないはずだ。

ナオは改めて禍玉まがたまに念を込めた。しかし、

手のひらの上で光りながら回転する禍玉まがたまは、何も反応を示さない。

「まだダメか。もっと近づかないと反応しないのか？ それとも、何かの方法で気配を消しているのか……」

せめて目に見える範囲で地割れができれば、どの方向から力が加わったのかわかるのだけれど。さっき、蒼馬たちといるときに、もっとよく見ておくべきだった。今から戻ろうにも、道は倒れたビルでふさがれてしまっている。

——あと、手がかりになるものは……

学校の前にできた、最初の地割れ。

あれは、校門に向かって右から左に伸びた。つまり、禍物まがものは校門に向かって右の方角にいる、という可能性が高い。しかし、

ナオは、情けなさそうにつぶやいた。

「学校がどっちを向いているのかわからん……」

方角を考えようとすると、頭の中が混乱してくる。ナオは、鈴木奈緒の方向感覚の鈍さを恨んだ。

他人の体を借りるということは、単純に手足を借りるということではない。方向音痴の体を借りれば、当然、方向音痴になってしまう。

とはいえ、身体能力は体の持ち主よりも数段高くなる。これは、百パーセントの出力では筋肉を傷めてしまうため、人間が無意識のうちに力を抑えているからだ。この無意識の抑制を緩めれば、驚くほどの運動能力を発揮できる。

もちろん、体を持たなくなったナオは無意識の抑制などはしない

から、筋肉を傷めない程度に調節すれば、一般人の二倍程度の力を出すことができる。けれど、

視力・聴力、それから方向感覚などは、どうにもならないのだった。

「もう一度、目の前に地割れができるのを待つしかないのか！ それまでに、」

ナオは、その続きを口に出すことができなかった。

それまでに、

それまでに、

いったい、何人の人が、地割れにはじき飛ばされ、倒壊した建物に押しつぶされ、

火災に巻き込まれ、命を失うのだろう。

ナオは、人の波を、呆然と眺めた。



家に帰るまでの足取りは、とても重かった。

——鈴木奈緒と仲良くなったような気分を味わって、嬉しいか？ その言葉は、蒼馬にとってはとてつもなく鋭く、重い。ちがう、と首を振ってみても、自分自身がそれに納得していないのがよくわかる。だから何度も、

蒼馬の耳にナオの声が響き、その都度首を振ってごまかさなければならぬ。

ほとんどの人が避難してしまったのだろう、辺りは静まりかえっている。ときどき遠くから聞こえる地鳴りとサイレンの音、それから自分の足音しか聞こえない。蒼馬の行く手を遮るようにアスファ

ルトが激しくささくれていて、それはブロック塀を突き抜けて横の家にもつすぐ向かっている。その家は二階部分が一階部分を完全に押しつぶして、平屋のようになっている。

「うわ、酷いな…」

地震とは違って、地割れの通り道にある家だけに被害が出ているようだ。両隣の家はなんともないのに、真ん中の家だけが崩れている様子は不思議なものだった。

何とか立っている門柱には、「避難所（小学校）にいます。皆無事」というメモが貼られている。両親のことを思い出して蒼馬は少し焦ったけれど、蒼馬の両親は市外に働きに出ていてまだ帰る時間ではない。最悪、家が全壊していたとしても、両親は無事だろう。

蒼馬は崩れた家を呆然と見ていたけれど、ガスの匂いに気づくとその場を離れた。当然ガスは止められているはずだけれど、だからといって安心してそこにいられるわけでもない。なにより、自分の家がどうなっているかが気になった。

第二章（2）

第二章（2）

蒼馬の家に着くと、陽はすっかり傾いていて、家の中は薄暗かった。仕事に出ている両親が帰ってきた痕跡はない。職場は市外だから、おそらく、直接避難所に向かったのだろう。それはそれでいいとして、

停電で、テレビもパソコンも使えなかった。

大きな事件があれば臨時ニュースが流れ、インターネットで調べればなんでもすぐわかる、という環境で育ってきた蒼馬は、停電になっただけで目と耳がふさがれた気分になった。こういうときにはラジオが役に立つけれど、蒼馬の家にはラジオはなかった。

どうしようもないじゃないか。僕には何もできない。

蒼馬は、自分に言い聞かせようとした。

僕は、ただの真寄市民だ。被災者の一人なんだ。

とにかく避難所に逃げて、父さんと母さんを安心させて、災いが去ったら家に戻って。

「父さん、か…」

鈴木奈緒には父親がいない。今は母親との二人暮らしだ。

母親は、心配しているだろう。

もちろん、自分の娘が、この大災害の元凶にもっとも近づき、おそらくは直接対峙することになるだろうなどは、知っているはずがない。いつまでたっても帰ってこない娘、避難所にも現れない娘を心配する母親の気持ちは、どんなにつらいものだろう。

ナオは、無事に帰ってくるのだろうか？　そして、鈴木奈緒の体を無事に返してくれるのだろうか？

「心配しても仕方ないんだよな…」

のろのろと立ち上がり、納戸の奥から非常持出袋を引っ張り出す。「こんなに奥にあったら、いざってときに取り出せないだろう」と父さんがいつも怒っていた。でも、ふだんから目立つところに置いておけるほど、蒼馬の家は広くない。

念のため袋の中をチェックしていると、誰かがドアをどンドンどんと思いい切り叩いた。

「うわっ、だだだ誰だよ！」

チェーンをかけたまま恐る恐るドアを開けると、その隙間からシイがぎろりと蒼馬を睨んだ。

「ひいつ、シイさん……」

「蒼馬、なんだこのチェーンは！ 開けろ！」

「ちよっ、開けるから待ってよ」

チェーンを外すと、シイはドアの前に仁王立ちしていた。

「よう。……それは何だ？」

シイは、蒼馬が抱えている銀色の袋を指さした。わざわざ確認しなくても、非常用持出袋だということは一目でわかる。それでも聞くのは、その質問に別の意味があるからだ。

「避難所へ行くのか？」

責めるような口調を、ぎりぎりまで抑え込んでいる。ただの質問だ、と、シイは自分に言い聞かせる。けれど、

蒼馬は、微かに含まれたシイの言葉の意味を敏感に感じ取った。

「僕がいたって何もできないよ。ナオは、鈴木さんの体を無事に返すって約束した。それでいいじゃないか。それに、」

悔しげに、軽く下唇を噛む。

「もうどうしようもないんだよ。電気が止まってるんだ。テレビもつかないしパソコンも使えない」

「……それか」

「ん？」

シイは、ごほんと咳払いをした。

「さっき、いくらチャイムを鳴らしてもお前が出てこなかったから、

てつきりあたしを無視してるんだと…」

「それであんな真っ赤な顔して怒ってたのか。怖かったよ」

「う…悪い」

「とにかく、テレビもネットもだめ、ラジオもない。非常袋の中にラジオがあっただけで、父さんが仕事中に野球聞きたいからって、持って行っちゃったんだ。ラジオがあれば、ニュースが聞けるのに…。携帯も圏外になっちゃってるし、近所の人たちはみんな避難しちゃったみたい。新聞はあるけど、今回のことはまだ載ってるわけがないって、さっき気づいた。もうどうしようもないんだ」

ぶふ、とシイが吹き出した。

「お前、なんだかんだ言っているいろいろやってたんだな。ホントはナオモドキのところに…、いや、奈緒のところに戻りたいんだろ？」

「そつ、そんなことは」

「お前、そんなに奈緒が好きか」

ぼつ、

と蒼馬が赤くなることを予想していたシイだったけれど、

蒼馬は、とても、

悲しそうな顔をした。

「…うん」

「蒼馬、そういうときはなあ、真っ赤になって否定するもんだぞ。そんな顔されたら、…あたしが悪いこと言っただけじゃないか」

「ごめん。でも、僕は嫌われてるってわかってるから」

非常袋から取り出した懐中電灯を、点けたり、消したり。

親指がスイッチを押すたびに、蒼馬の心も明滅を繰り返す。

かち、かち、かち、と繰り返される音を耳障りに感じたのか、シイは苛立ちを隠さずに言った。

「お前さあ、なんで奈緒に嫌われてると思ってんの？ …幼なじみなんだろう？」

「…シイさんには関係ないだろ」

「昔ちよっとおイタをしちゃったとか」

「そんなんじゃない。ほつといてよ、シィさんには関係ないんだ」
関係ない、という言葉がシィの胸に刺さる。それは、ナオに言われた同じ言葉よりも鋭く深く、突き刺さる。

「関係なくない。奈緒は、」

——あたしの、

「奈緒は、」

——大切な、

大切な。

「ああもうああもう、めんどくさいな！」

突然頭を押さえてうずくまったシィ。蒼馬がその顔を覗き込もうとする。その瞬間、

「シィさん…？ どうしたんぐっ！」

立ち上がったシィの頭が蒼馬の顎を直撃した。

「ひ…ひたいひよ…」

「いいか、奈緒はな、お前のこと嫌ってないよ！ ナオモドキがそう伝えてくれってさ！」

顎の痛みを忘れて、蒼馬がぼかんとシィを見上げる。

「まあ、好かれてるわけでもないけどな。——勘違いするな、あいつは奈緒の心を覗いたわけじゃない。ええとだから、その、なんとなくわかる…とかそういうものらしい」

「ひいはん、ほれをひひにはらはら…？」

「…あん？」

「シィさん、それを言いになざわざ？」

「まあ、それだけじゃないけどな。お前たちには仲良くしてほしいのは確かだ」

「お前たちって、…僕と、ナオ？」

「そうだ。いや、奈緒？ 違う、ナオモドキか？ そうじゃなくて、奈緒だよ、奈緒」

「ええと、ナオって、ん？ ナオ？ モドキじゃないほう？ ああ、鈴木さん？」

「そうそう、鈴木奈緒だ」

「はは、まぎらわしいね。ええと、それで鈴木さんが…なんだっけ」
ぱこん、とシィが蒼馬の頭を叩く。

「お前はもう…、まったくもう…」

「えへへ」

えへへ、とおどける蒼馬の目は、けれど、とても寂しげだった。

「なあ蒼馬」

「なに？」

「あたしは、か弱い女の子だから」

「はあ？」

ぱこん。

「お前に、ナオモドキを見張っていてほしいんだ。奈緒の体を、無事に返してもらうために」

「僕だって、何ができるか…」

「頼む。…うーん、もうちょっと可愛くお願いできればいいんだけど、あたしにはこんなふうにはかできないんだ」

蒼馬は、頭を下げたシィから目をそらす。それは他でもない自分が、自分には何もできないことをよく知っているから。シィの願いを受け入れることができないから。

「僕には無理だよ。シィさんも言ったろ？ 僕は運動音痴の意気地なし。それに、」

悔しそうに下唇を噛むシィを、ちら、と見る。

「ナオが言ってた。僕らには、まがもの禍物を探す術がない。だから、ナオがどこにいるかも、もう、わからない。だからシィさん、頭をあぐっ！」

シィが（たぶんわざと）突然立ち上がって蒼馬の顎に頭突きを食らわした。

「ひ…ひたいひよ…」

「そうね、手も足も出せないね。ナオモドキの言ったとおりだ。悔しいけど、あとはあいつを信じて任せるしかないか」

蒼馬とシィは家を出た。

車庫では、ブロック塀が倒れて父の車のボンネットが凹んでいる。蒼馬の父は、多少、車に傷が付いても気にするような人間ではない。現に、ドアには蒼馬が自転車を倒したときのひっかき傷がそのまま残っている。

とはいえこんなに凹んでしまっただけでは修理しないわけにはいかないだろう、修理代はいくらくらいかかるんだろう、エンジンはかかるのかな、と考えていた蒼馬は、突然別のことを思いついた。

「……！ ラジオ、あるじゃないか！」

「え、おい、蒼馬？」

蒼馬は玄関に駆け込んだ。シューズラックの横にぶら下がっている車のキーをむしり取り、車に飛び乗る。エンジンのかけ方は知っていた。エンジンをかければカーステレオが使えることも、知っていた。

カーナビを買ってからはすっかり使わなくなった地図帳が、ドアポケットに入れたままになっている。

蒼馬は地図帳の広域図のページを開き、ラジオから流れてくるニュースに聞き入った。

「蒼馬、どうするんだ？」

「しっ」

真寄市だけでなく、北側の隣の市にも被害が出ているらしい。蒼馬は、被害が出ている地域をおおざっぱに丸で囲んだ。

——そうだ、僕は、どうするつもりなんだ？

ニュースで読み上げられている地域に印を付けてゆけば、たぶんだけど、どこかを中心に被害が出ている、ということがわかるだろう。そこには間違いなく、まがもの 禍物がいる。

それがわかったとして、僕は、

僕は、

僕は、どうするつもりなんだ？

決まってるじゃないか。

そこに行けば、またナオに会えるんだ。

会ったからといって、自分に何ができるかはわからない。

鈴木さんの体が心配なのと、ナオ自身が心配なのと、どっちの気持ちが大きいかも、今はわからない。

もう一度、ナオに会う。話はそこからだ。

『繰り返し、地割れのため通行できない道路をお伝えします。真寄市大迫、北大通り…』

——ナオを手伝う？

『道路は大変混雑しています。避難する際は自動車の使用は控えてください…』

——鈴木さんの体を守る？

『火災の発生している地区は以上です。停電していますが、切れた電線には注意を…』

——たとえば僕を、

『北部の丸木地区に被害が集中している模様です。該当地区にお住まいの方は…』

——僕を、犠牲にしても。

半ば無意識にマッピングされた地図は、やがて被害範囲の中心地を示しはじめていた。

シィは、その地図に書かれた文字をつぶやくように読み上げた。

「まよりタワー…」

それは、真寄市北部にそびえ、市民からは税金の無駄遣いと半年に一度くらい必ずやり玉に挙げられる、周囲の景観に不似合いな観光タワー。

その中ほどには大きなデジタル時計が光っていて、さらに上には、真寄市全体を見渡せる、展望室がある。

蒼馬は、あらためて学校の前にできた地割れを思い出した。それは確かに、まよりタワーの方角から、まっすぐにのびてきた。

蒼馬は確信した。

「ここに、まがもの禍物があるんだ」

そして、そこに、
そこに、ナオが、来る。

「蒼馬…、お前かっこいいじゃないか。キスしていいか？」

「…いや、遠慮しとく。あとが怖いし」



すっかり暗くなった街を見つめ、ナオは焦っていた。

遠くから聞こえる地鳴り、それに呼応する悲鳴。完全に秩序を失

った人々の、恐怖と絶望に支配された混乱。

まがもの 禍物の手がかりは何もなく、まがたま 禍玉も一向に反応しない。

「むう、こんなに高いビルをいくつも建てるから…、まがたま 禍玉の力も遮られてしまうし、被害も大きくなる」

街はもう壊滅状態と言っているだろう。そこら中にコンクリートの塊がころがっていて、ぴくりとも動かない人が何人も横たわっている。ナオは、

目を背けることしかできなかった。たとえそれが、
自分が引き起こした災いであっても。

また今日も、

ナオは、ナオにとっての昨日のできごとを思い出していた。

また今日も、大勢の人が命を落とす。落としている。

それはすべて、わたしのせい。

わたしが解き放った、まがもの 禍物のしわざ。

まがもの 禍物を解き放った、わたしの、しわざ。

ナオの足は、地面にめり込んだように動かなくなる。

重い。わたしの足が、とても重い。

自分が背負ったものの重さを、わたしはもう、支えきれない。
ナオは、崩れるようにしゃがみこんだ。

禍物^{まがもの}を世に放ったために、その償いとして、

父に突き放され、こんな遠くまで、

決して後戻りできない旅路を、わたしは、

ひとりで、

重い足を引きずって、歩いてきた。

もう、いい。

ナオは、自分の中に湧いた、そんな気持ちに驚いた。けれど、

わたしは、もう、十分尽くした。

毎日毎日、目覚めては戦い、眠り、目覚めて、戦い、
そうして数千年の間、世を守り続けてきた。

たった、ひとりで。

だから、もう、いい。

もうこれ以上、守れない。

鈴木奈緒のお母さん、ごめんなさい。

クラスみんな、ごめんなさい。

蒼馬、

シィ、

この世界でわたしのことを知っている、
たった二人の、

たった二人の、

：仲間。

ごめんなさい。

わたしは、お前たちだけですら、もう、守ることができない。

お父さん、

ナオの胸が、ぎゅっと痛む。

これは誰だ？

いま、わたしの中に現れようとした、この人は誰だ？

ぼんやりとしか浮かばない、この人は、

わたしの父？ 違う、そうじゃない。

これは、鈴木奈緒の、父親。

そうだ、

お父さんはどうしたんだっけ。

思い出せそうで、思い出せない。

「奈緒……。そうか、思い出したいくないんだな」

ナオは、自分の中で眠っている奈緒の、触れてはいけない部分に
は決して触れようとしなかった。それは、自分なりの、礼儀だ。

しかし、一つだけ、わかったことがある。

それは、鈴木奈緒の、父親に対する愛情。

失った者への懐しみではなく、

去った者への慰めではなく、

純粋な、子供の頃にしか持ち得ない、

純粋な、純粋な、愛情。

ナオは、困ったように笑った。

わたしは、父を憎んでいる。
もちろん、悪いのはわたしだけれど。
それでも、わたしは、父を、憎んでいる。
わたしをこれほど苦しい日々を追いやった、
わたしの、父を。

けれど、そのわたしが借りているこの体には、
父親への愛情が染みついている。

失ってなお、
失ったからこそ、

その傷を埋めるように、
澄み切った愛情が染みわたっている。

——「帰りたいんじゃないの？」

そうだ、シイの言うとおり、わたしは帰りたい。父の元へ。

——「やっつけちゃえばいいのに」

そうだ、蒼馬の言うとおり、禍物まがものをすべて封印してしまえばいい。
その後はどうなるかわからない。永遠に目覚めることがないかも
しれない。

けれど、

けれど、

もう、

「もう、終わりにしよう」

絶望に似た意味のその言葉を、けれどナオは、
目を輝かせてつぶやいた。

ナオはゆっくりと立ち上がる。心の熱いところから湧いてきたこ
の気持ち、少しも取りこぼすことがないように。ゆっくりと、ゆ

つくりと。

相変わらず、足は重い。体全体が氷でできているように冷たく、固い。けれど、

その重い足を持ち上げるだけの強い力を、凍った体を溶かすだけの熱い気持ちを、

ナオは、今、手に入れた。

「とりあえず、学校に戻ろう。最初の地割れを見てみよう」

拳を握りしめてまっすぐに立ち、真っ赤なりボンを踊る炎のようになりかせて。

傾いたビル、がれきの山、吹き上げる煙、火災で赤く染まった空から目をそらすことなく、ナオは四方を見回す。

「…で、学校はどっちだ？」

第二章（3）

第二章（3）

避難命令が出され、学校の近くには人の気配がなかった。

陽はすでに沈み、停電あたりは真っ暗だ。さっきまで月が見えていたけれど、今は雲で隠れてしまっている。

赤黒い空を背に、校舎は不気味に黙り込んだままそこにいた。

建物自体は壊れていないようだったけれど、振動によるものか、ガラスはほとんど割れてしまっている。

校庭にも何本かの亀裂が走っていて、飛び越えるのに苦労した。

非常灯すら消えてしまった校舎の廊下は、遠くの火事で赤く照らされている。割れたガラスをじゃりじゃりと踏みながら、ナオは屋上に向かった。階段は校舎の奥まったところにあり、驚くほど静かだった。こつ、こつ、と足音だけが響く。校舎の外では、あちこちで起きている火事の影響で強い風が吹いているはずだけれど、ナオの耳にはそれは微かに聞こえるだけだった。

強い風に押さえられている屋上へのドアを、体全体で押すように開けた。

フェンスにしがみつくように校庭を見下ろし、校門の向こうの地割れを見る。

——地割れは、こちらから見て、左から右にできた。だから…、

ナオは、左の方に目を移し、息をのんだ。

ずっと雲が薄れ、青白い月の光が赤い炎の光を押しのける。

倒れたビル、崩れた家々、それらはすべて色を失い、

青白い光に飲み込まれている。
ただ静かに、街は、その屍を、
横たえていた。

――すべて、

ナオの目から、涙があふれた。

――すべて、死んでしまう。だから、

「これで、終わりにする」

ナオは、涙を指でぬぐい取ると、
遠くにそびえるタワーを睨みつけた。



「遅かったね、ナオ」

まよりタワーの真っ暗なロビーで突然呼びかけられて、ナオは凍り付いた。

声のするほうを見ると、蒼馬がチケット売り場のカウンターにもたれかかっていた。カウンターの内側にはシイがいて、肘をついてわざとらしくあくびをする。

「なっ、なっ、お前、」

蒼馬たちを指すナオの指が、滑稽なほどに震えている。

「お前たち、なんで、ここに？」

蒼馬は、よろりと立ち上がった。あちこち怪我をしていて、辛そうだ。けれど、蒼馬は場違いにおどけて見せた。

「なあに、簡単なことだよ」

ムツとするナオを横目で見て、蒼馬は続けた。

「ラジオで街の被害状況を収集し、地図上に印を付ける。そうしたら、その中心にこのまよりタワーがあったというわけさ。実に簡単なことだよ。一つだけ苦労があったとすれば、」

蒼馬は大げさに間をおき、ナオが怒りに震えているのを確認してから、とどめを刺した。

「一つだけ苦労があったとすれば、この暗い中でずーっとナオを待ち続けなければならなかったことだねえ。はっはっは」

「お前っ！」

ナオは蒼馬につかみかかった。

「お前、何を考えている？ 遊びじゃないんだ、死ぬかも知れないんだ！ お前、だって、もうこんな……あちこち擦りむいて……」

ナオの手が震えている理由がさっきまでとは違うことに、蒼馬は気づいた。

「……ナオの役に立ちたいんだよ」

「役に立たん」

「手伝いたいんだよ」

「足手まといだ」

鋭く切り返すナオに、蒼馬は口を閉ざした。ナオは、ゆっくりと繰り返した。

「あ・し・で・ま・と・い・だ」

沈黙の中、遠くから地響きが聞こえる。こんな押し問答をしている場合じゃない。シイはカウンターをひらりと飛び越えて、蒼馬とナオの間に割って入った。

「おいナオモドキ、この時代はね、情報をどうやって集めるか、それが重要なよ。蒼馬は確かにだらしなくて情けなくて臆病で小心者で優柔不断でビビリでへっぽこで」

「あの、シイさん、……もうそれくらいで」

調子に乗ってきたところを邪魔されて、シイは不満そうに口を尖

らせた。

「まあ…、蒼馬が足手まといなのは違いだね。でもね、情報を効率よく集めてあんたより早くここに来たことは認めるわよね？ それがこの時代のやり方ってこと、あんたにはそれができないってこと」

聞いているのかいないのか、ナオは黙って横を向いている。

「それにね、この男、あんたにあんな酷いことを言われたのに、それでも手伝うって言うてるのよ？ 少しくらい、その気持ちに応えてやってもいいんじゃないの？ だいいち、」

ひと呼吸置くことで、シイはナオの視線を自分に向けさせた。

「タワーに登りたいんでしょ？ どうやって登るのか知ってるの？」

「ふん、エレベーターくらい知ってる」

ナオはエレベーターの前に立ち、ボタンを押した。当然だけれど、停電しているので何の反応もない。ナオは、シイがニヤニヤしているだろうと思いつつ、ゆっくり振り返った。

シイは、

ニヤニヤしていた。

「停電してるからね、エレベーターは動かないわよ」

「…階段はあるのか」

「さあねー」

むう、とナオがむくれた瞬間、

ドン、と突き上げるような衝撃。タワーから街の方へ、大きな地震割れができた。

「ふざけてる場合じゃないな…。蒼馬！」

シイが鍵の束を投げ渡す。

「事務室の裏口から出て非常階段を登ると、時計の管理室がある。そこを抜けて管理室の反対側から出れば、展望室まではすぐだ。がんばれよ」

ぐっ、と親指を立てるシイに、けれど蒼馬は、

「…あれ？」

と、間の抜けた返事をした。

「シィさんは、行かないの？」

「行かない」

「だって、シィさんだって、ナオを見張りたいんでしょ？」

「うん。だから、後は頼んだぞ」

「頼んだぞ、って…」

「よろしく」

「でも、」

「がんばれ」

「あの、」

「いってらっしゃい」

「いや、」

「うるさいな！ あたしは高いところダメなんだよ！ 展望室は地上百メートルだぞ？ エレベーターで登るならまだいいけど、むき出しの非常階段なんて、ああもうああもう、登れるかつ、ばかつ！」
ぜいぜいと肩で息をするシィを数秒間眺めた後、

蒼馬は意外そうに、ナオはからかうように、それぞれ「へえ」と感想を漏らした。

「と…とにかく早く行け。非常階段の入口の柵は開けてあるから」

蒼馬は、シィが指さす方にある事務室の入口に向かって走り出した。ナオは一瞬出遅れたことに舌打ちしてから蒼馬の後を追う。が、開けっ放しの事務所のドアの手前で、蒼馬は急に立ち止まった。

「ぎゅむ」

蒼馬の背中に思い切り切り鼻をぶつけたナオは、声にならない悲鳴を上げてうずくまってしまった。

「くくくっ、急に止まるなっ！ メガネが壊れたらどうする！」

「ゴ…ゴメン。ところであの、シィさん、」

「ん？」

「なんで鍵のこととか事務室のこととか詳しいの？」

「あ…、去年ここでバイトしてたんだ」

「ウチの学校、バイト禁止だよね？」

「まあ、その、まあ、」

「禁止だよね？」

「ああもう、うるさいな、過ぎたことをぐだぐだと」

事務所の入り口を塞いでいた蒼馬はまだ何か言いたそうだったけれど、ナオに背中を蹴飛ばされて走り出した。

非常階段は鉄骨で組まれたタワーの中心を貫いていて、金網で囲われてはいるけれど、シイの言うとおりほぼむき出しだ。

二人はずるずると這うように、息を切らせて登っていた。

「おま、え、鍵、を、置いて、下りろ！」

「はあ、はへ、ひはひ、はほ」

少し遅れて登ってくる蒼馬の返事は、声にならなかった。

ナオは踊り場で振り返った。肩で息をしている。

——筋肉にはまだまだ余裕があるが…、心肺がついてこないな。

少し体を休ませなければ。

ナオは、禍物まがものを追い始めてから、ここまで体を酷使したことがなかった。

——やはり華奢な体は使いにくい。…あと、方向音痴も。

やっと蒼馬が一つ下の踊り場にたどり着いた。

ナオは、蒼馬の姿が見えたことにホッとしたけれど、

「今からでも、下りろ」

「やだ」

やだ、ってまるで子供じゃないか。ナオはあきれて、困って、少しおかしくて、

街を見下ろし、溜息をついた。

すでに陽は落ちていて、薄いけれど雲が空を覆っている。街を照らすものといえば、あちこちで起きている火災だけで、雲の底までが赤黒く染まっている。

蒼馬はそんな光景に息をのむ余裕もなく、階段を這う。

「どうしても手伝いたいんだよ」

「わたしはわたしだ、鈴木奈緒じゃない！ いい加減にしろ！」

ナオは、蒼馬が追いつかないうちにと、階段を登り始めた。

「あっ、ナオ、リボンが」

「リボン？」

頭の後ろに手をやると、赤いリボンがほどけかかっているようだった。

実際に髪を留めているのはリボンの下のゴムだから、リボンがほどけても何も問題はない。けれど、

お母さんが言っていた。これは、「大切なリボン」。

なんとなくだけれど、そう、これは大切なもの。

だから、

面倒だけれど、

結び直さないと。

「痛っ…」

右手の親指は、人混みで踏まれて、まだ腫れていた。リボンを結ぼうとすると、とても痛い。なるべく親指を使わないようにしたけれど、なかなかうまく結べなかった。

「——っ、もうっ、いいっ！」

ナオはリボンを放った。

「だめだよっ！」

はらりと落ちるリボンに、蒼馬は飛びついた。

このリボンは、これは、鈴木さんの、

大切な、大切な。

「捨てちゃだめだよ、このリボンは、」

「言うなっ！」

蒼馬が差し出したリボンを、ナオがむしり取る。

そうだ、わかっている。

このリボンは、大切な、大切な、お父さんの、
けれど、知りたくない。

そうだ、お父さんが、私に、
違う、知りたくない。

亡くなる前の日に、私に、

知ってはいけない。

奈緒、思い出すな。思い出さなくていい。

けれど、

そうだ。

亡くなる前の日に、私にくれたもの。

それからずっと、

ずっと、ずっと、ずっと、

心の奥の方にしまっておいた大切な想いが、

今、しみ出して、

ナオの心に溶け込み、

そうだ、

わたしは、

わたしも、

父を愛していたのだと思う。

だから、

突き放された悲しみを、憎しみに置き換えて。

二度と会えない悲しみを、憎しみに置き換えて。

そうして今まで戦い続けて。

「お父さん…」

蒼馬は、ぼろぼろと泣き出したナオにとまどい、
だまってナオの髪にリボンを結んだ。

第二章（4）

第二章（4）

「：おかしいか」

ようやく泣きやんだナオは、袖で涙を拭きながら言った。

「心は体よりも制御が難しい。鈴木奈緒の持っている感情が、うまく制御できなかった」

「鈴木さんは、」

蒼馬は、ナオの言葉を聞いたか聞かないか、独り言のようにつぶやいた。

「鈴木さんは知っているのかな。お父さんの事故の理由を」

ナオには、蒼馬の言葉の意味がわからなかった。

「浅い記憶にはないな。知らないのか、知っていても思い出したくないのか…、それはわからない」

「そう…」

うつむく蒼馬に、ナオは感じ取った。

蒼馬が、わたしにまわりつく理由。

それは鈴木奈緒に対する好意だけでなく、何か他の。

けれど、ナオが答えを出す前に、蒼馬はぼそりとつぶやいた。

「僕の、罪滅ぼしなんだ」

ナオは、蒼馬から目をそらした。

「鈴木さんのお母さんとの、約束なんだ。僕は、鈴木さんを守らなきゃならない。つきまとして嫌われても、構わない。それが僕の、罪滅ぼしなんだ」

罪滅ぼし。

わたしの言えなかった言葉を、蒼馬は口にした。

理由はわからないけれど、蒼馬は、

蒼馬も、

自分の罪と戦っていた。

わたしは、けれど、

自分の罪から逃げようとばかりして、

決してそれを口にせず、

ああ、

わたしは、卑怯だ。

何万もの人の命を奪い、

ああ、

わたしは、

その罪から逃げて、

ただ禍物^{まがもの}を倒すことが使命だと、うそをついて。

わたしは、

卑怯だ。

蒼馬は、呆然としゃがみ込んだナオを追い越し、階段を上りだした。

「だから、ゴメン。ナオにもつきまとうことになるけど、それでも僕はナオと一緒に行くよ」

「待てっ！」

「待たないっ！」

ナオは立ち上がって蒼馬に追いつき、蒼馬の腕を引いた。

「放してよ！」

ナオは、蒼馬の腕を掴んだまま、数枚の護符^{ふし}を渡した。

「自分の身を守るためだけに使え。それから…、無茶はするな」

ふたりは、再び階段を上り始めた。

「や…やっと管理室まで来たな」

まよりタワーには、展望室の十メートルくらい下に大きなデジタル時計がある。その調整をしたり、予備の電球を保管しておくための部屋が管理室だ。

鍵を開けて中に入ると、そこはあまり広くなく、通路のように細長い部屋だった。時計の操作盤があって、隅のほうには電球の箱が数個置いてある。奥には入口と同じようなドアがあり、両側にはアルミサッシの窓ガラスがはめられていて、少し鉄骨や時計の電球が邪魔だけど展望室に負けないくらい眺めがいい。

「この時計はね、」

窓から街を見下ろしながら、蒼馬が話し始めた。

独りごとではないけれど、かといって特にナオに聞いてもらおうというつもりもない。話したいから話す、という程度の話し方だった。

「あてにならないって、みんな言ってる。一週間で三分くらい進むんだ。たいてい月曜日の朝に直されるみたいだけど、ひどいときは十分くらい進んだままだった」

ナオは黙っていた。蒼馬は特に相づちを求めているようだったし、なにより、蒼馬の寂しそうな目つきが、話しかけられることを拒んでいるようだったから。

ナオが感じたとおり、蒼馬はナオが口を挟むのを待たなかった。

「こういう時計って、普通は下の事務室から操作できるじゃない？でもここのは、この管理室まで来ないと調整できないんだ。だから、」

ここで初めて、蒼馬はナオのほうを向いた。ただし、目を合わせることとはなかった。

「だから、なかなか直さないんだね。…簡単に直せるんなら、毎日

でも直すんだろうけど」

ナオには、なぜ蒼馬がそんなことを話すのか、わからなかった。何か意味があるのかもしれないし、他に話題が見つからなかっただけかもしれない。

だからナオは、「そうだな」と返しただけだった。

そのまま黙り込んだ二人は、ただ街を見下ろしていた。ズシンという地響きが伝わってくると、街に新たな地割れができた。小さな爆発が地割れに沿っていくつも起きる。

「ナオ、そろそろ行こうか」

管理室を出ようとする蒼馬を、けれどナオは腕を引いて引き留めた。

「蒼馬、お前と鈴木奈緒の間に何があった？ お前がさっき言った事故って何だ？」

蒼馬は何かを言おうとしたけれど飲み込んで無理に笑顔を作ると、

「：まあ、いろいろとね」

とだけ言うと、管理室から出ていった。

「でもさ、」

蒼馬は、手すりにすがりつくように階段を上りながら、少し後を登ってくるナオに声をかけた。

「自分の街がさ、禍物まがものに荒らされたんだ。その禍物まがものを、退治してくれる人がある。だから手伝いたいっていう気持ちも、本当だよ」

「退治じゃない。：眠らせるだけだ」

「なんで？　なんかこう、魔法とかないの？　変身すると強くなる

とか、オフダの精を出して戦わせるとか」

「お前はアニメの見過ぎだ」

「：鈴木さんに言われたくないよ」

再び地響きが階段を伝う。

「わたしにあるのは、父上から授けられた、この護符くふうと禍玉まがたまだけだ」
「お父さんから？」

「父上は、最大のマジナイ師として、クニを治めていた。…もう、数千年前の話だ。わたしは、その跡を継ぐべく、父上について修行をしていた。しかし…」

ナオは、

自分の“罪”を、
語り出した。



「大丈夫、わたし一人でも、できる」

父は夕方まで帰らない。少女は、集落の外れから延びている山道を一人で歩いていった。

山の奥の方へと続いている道は、いつ何が、たとえば山賊のような輩が飛び出してきたとしても不思議ではない。けれど、父が治めているこのクニは平和そのもので、周囲のクニとも争いが起こることはめったにない。したがって人々は暮らしに満足していて、だからわざわざ安定した暮らしを捨てて山賊になろうという者もいなかった。

それは、人々に信頼されるに足る父の力と努力によるものだ。

「それは認めるが…、いずれわたしがその跡を継ぐとなると、いささか気が重い」

けれど、何も問題がなければ、王のような存在が信頼されることはない。危険があつて、それを回避し、それで初めて王は尊敬され、崇められる。

危険。

それは、時折現れる禍物まがものによる災いと、時折気まぐれを起こす神による災い。

——禍物まがものは、封ずればいいからまだましだ。厄介なのは神様だ。

大雨を降らされては手も足も出ない。…いつそ神様も一度封印して、痛い目に遭ってもらってはどうかだろう。

こんな事を口にしたら叱られるだけでは済まないけれど、少女は少しだけ神様に対して不敬な空想をして、クスクスと笑いながら山の奥に向かった。

やがて少女は、気を付けていないと見落としそうな小さな目印を見つけ、小道に逸れた。

その道は両側から草が覆い被さるように茂っていて、よほど慣れた者でないとそこが道だということすらわからない。つまり、ほとんど人が通ることのない道だった。

「大丈夫、わたし一人でも、できる」

少女は、木に刻まれた目印で道が間違っていないことを確かめるたびに、そうつぶやいた。

「だいたい父上は、わたしをいつまで子供扱いしているつもりだ」

今朝家を出る父は、

くどくどと、

ああもう、思い出すのもうんざりするくらいくどくどと、

まるで幼子に対してそうするように、何度も何度も繰り返して留守中の注意を並べ立てた。

なかでも頭に來たのは、「一人で川に遊びに行っはいかんぞ」という一言だ。

わたしはもう川遊びをするような年ではないし、行ったとしても流されるようなことはない。まったく、父上はわたしを子供扱いしすぎる。

けれど、

低くまろやかな父の声は、聞いていると深い海の底でゆったりと眠っているような、そんな安らいだ気分になる。父の声は、声に限って言えば、嫌いではない。いや、

——そうだ、父の声に限って言えば、好きだ、とても。

少女は少し赤くなっただ頬に冷たい手の平を当てて冷ました。

草木はますます深くなり、陽も射し込まなくなってくる。がさがさという草を蹴分ける音だけが響いていて、立ち止まってみると一転、何も聞こえなくなる。

この付近には動物や、小鳥すらもない。それは、彼らにはわかるから。ここがただの森ではない、と。

普通の人間は、鳥の鳴き声がしないことで初めて、ここの空気が少しよそとは違うことを知る。もっとも、ここに来るまでに何重にも張られた結界を抜けることができれば、の話だ。

——ここだ。

両側から道を閉ざすように茂っている木を押しのと、一気に光が射し込む。目の前に大きな崖がそびえ、その周囲だけが嘘のように草木も生えず広場になっている。崖には、人がかがんでやっと入れるくらいの穴が開いていた。どこまで続いているのか、真っ暗な穴の奥の方からは、微かに冷たい空気が流れてくる。

入口の中央に、握りこぶし大の禍玉まがたまがひとつ置いてある以外は、ただの穴。けれど、

この場所を知っているのは、父上と、わたしだけ。

この付近に立ち入れるのも、父上と、わたしだけ。

その他の者には、結界を破ることはもちろん、その存在に気づくこともできないように隠されている。それは、

——ここが、危険な場所だから。

王でありマジナイ師である父が、数々の禍物まがものを討し封じた洞窟。

——わたしはまだ、一人で禍物まがものを討したことはない。それでも、毎日の厳しい修行で、父に支えられながらではあるけれど、禍物まがものを倒すだけの力はあるはずだ。

「大丈夫、わたし一人でも、できる」

少女はもう一度つぶやき、穴の入り口に置かれた禍玉まがたまをつかんだ。禍物まがものが現れるのはせいぜい年に数回。それを待っていては、訓練にならない。一瞬だけ結界を消し、一体だけ禍物まがものを誘い出し、倒し、

封じる。

ここにいるのは、一度倒されて弱っている禍物まがものばかり。訓練用としてはどうだろう。

禍物まがものを放ったことは咎められるかもしれないけれど、

それ以上に、一日でも早く一人前として認めてもらいたい、その気持ちで、

少女を、突き動かしていた。

少女はつかんだ禍玉まがたまを慎重に持ち上げた。

禍玉まがたまが地面から離れた瞬間、結界は消滅する。同時に、洞窟の奥から数体の禍物まがものが出口に殺到した。

「っ！」

予想以上の勢いに少女はひるみ、慌てて禍玉まがたまを置いて結界を戻した。けれど先頭の数体だけは凄まじい勢いで、ごう、と少女をかすめるように洞窟から飛び出した。一瞬の間を置いて、少女の身代わりとなった護符ごふが数枚、シャンシャンシャン、と碎けて消える。護符ふが守りきれなかった頬と右足の皮膚は鋭く切り裂かれ、血が飛び散る。

放たれた禍物まがものは、すぐに上空高く登って見えなくなった。少女はよろめきながらも首にかけた禍玉まがたまを手取る。けれど、

空を見上げた少女の顔が、

青ざめる。

真っ黒い雲が、空を覆いはじめている。

あり得ないほどの勢いで雲が湧き、空を埋め尽くす。

地は人のもの、天は神のもの、それが理。その天を操る禍物まがものが持つ力は、

神のように、強大だ。

——こんな、こんな大きな禍物まがものが、どうしてここに？

この禍物まがものは、

わたしには、

大きすぎる。

呆然と、それでも禍玉まがたまを構える少女に、
雷となった禍物まがものは、

牙を、突き刺した。

「…馬鹿者が」

目を覚ました少女に、重くのしかかる言葉。
いつもはすべてを委ねられる父の低い声が、今日は、
体中の傷をさらに引き裂く。

少女は涙を拭こうとしたけれど、右腕が動かなかった。それが失
われていることには、気づかなかった。

「焦ることはなかったのだ。焦りは時に、…すべてを失う」

父は、血と混じった少女の涙を軽く拭いながら、傍らの医師を伺
った。医師とはいっても、この時代ではせいぜい薬草の知識を持っ
ている程度で、

死の傷を負った少女を癒すことはできない。医師はうつむき、う
なずいた。すべてを失う、という言葉の持つ意味に対して。

父は少女の体を抱え、祭壇へと運んだ。真っ赤な血が、ぼたぼた
と床を染める。

「お前はこのクニの王の娘だ。お前が放った禍物まがものから、後の世を守
る義務がある」

「父…上」

「禍物まがものは、時の流れに身を隠した。追わなければ、すぐに世は滅び
るだろう」

「しかし…、わたしには」

「行くのだ」

禍玉まがたまのひと振りで、少女は眠りについた。

最後に父の唇が動いたけれど、何を言ったのかはわからなかった。

少女の記憶にあるのは、そこまでだ。

「…間に合いましたか」

「わからぬ。あとは、数百年後に目覚めてくれることを祈るばかりだ。いかに私とて、時の先を見ることはできぬ」

抜け殻になった娘の体を見下ろす父に、医師は慰めの言葉を見つけることができなかった。

「これから、お嬢様には辛い毎日が待っていることでしょうか」

「うむ。しかし、それでも、」

父の声は、震えていた。

「それでも、少しでも長く、生きていてほしいのだ。…父親の、我が儘かもしれぬが」

少女が目を覚ましたのは、薄暗く、凍えるほど寒い部屋の中だった。

薄いぼろ切れのような布団の中で、少女は震えながら両手をこすり合わせた。

がさがさの手のひらが、乾いた音を立てる。少女は、それが自分の体ではないことに気づいた。

農民の娘らしい荒れた肌、栄養が足りなかったために細い、けれど実用的な筋肉がついた手足。少女は、手探りで自分のものになった体を確かめ、

現実を知った。

少女は、よろりと起きあがり、小屋のような家を出た。

夜明けには遙かに遠く、動くものは何もない。

月明かりが凍った空気を音もなく切り裂き、

少女の影を乾いた地面に焼き付ける。

時おり吹く風が、

着物の裾から容赦なく吹き込み、
少女の体を責める。

わたしは、もう、戻れない。

決して許されない罪を背負ったわたしは、

父の術によって放り出され、

永遠に、禍物^{まがもの}を追う使命をも負ってしまった。

遠くから聞こえてくる地響きに、

少女は、自分の使命と運命を知り、

両手で顔を覆って泣いた。

第三章（1）

第三章（1）

蒼馬とナオは、黙って階段を上った。

ナオは話すことをすべて話してしまったし、

蒼馬は、何も答えることができなかった。

ようやくたどり着いた展望室への入り口で、やっとナオが口を開いた。

「今までは、」

それは、独り言ともとれるつぶやきだった。

「父から授かった護符を貼り、たとえ封印できなくとも一時的に眠らせられればいい、くらいにしか考えていなかった。その程度の力しか、わたしは持っていないから」

ナオはその言葉が続けなかったけれど、蒼馬にはナオの言おうとしていることがわかった。

——完全に、封印、するつもりだ。

「ナオ…、いざとなったら、僕が囹になる。僕の体は自前だから、多少ケガしても誰も文句言わないし」

「鈴木奈緒の体を傷つけるな、ということだろう？ わかっている」
わかってているが…。

ナオは、その言葉が続ける代わりに、展望室のドアをゆっくりと開けた。

たまにしか開けられることのないそれは、キィ、とわずかに軋んだ。禍玉は、まだ反応しない。
まがたま

「ところでさ、禍物って、強いのか？」

「…？ なんだ今さら」

「いや、大事なこと聞いてなかった」

ナオは、呆れたように鼻を鳴らした。

「禍物も、わたしと同じように誰かの体を使っている。すばしこい体だと、護符を貼るのに苦労する」

「じゃあ、僕みたいな人なら楽なのか」

ナオは、何かを言おうとして飲み込み、一拍おいてから大げさな溜めいき混じりに言った。

「禍物だって、お前みたいな奴は選ばんだろ」

蒼馬は、情けなさそうな苦笑いを浮かべて、だよね、と答えた。それに応じるナオの落ち着いた笑顔が、蒼馬には嬉しかった。

ドアの隙間から覗き込むと、そこはエレベーターホールだった。エレベーターホールは展望室の中心にあって、左右に通路が延びている。どちらも円形の展望室に出ることができて、だからどちらからとも赤黒く不気味な光が射し込んでいる。ナオはするとドアを抜けると、蒼馬を呼び込んだ。

ドアを閉めると地上からの騒音は遮られ、二人の息づかいだけが聞こえるようだった。ナオは蒼馬を背中にかばいながらゆっくりと展望室に向かった。

「蒼馬、後ろを見ていてくれ」

「りよ…了解」

ナオと蒼馬は背中合わせになって広い展望室に出た。

ガラス張りの展望室からは、無惨な街の様子がよく見える。けれど、非常階段とは違ってガラスで仕切られているから外の音が聞こえず、その光景は微かな現実感しか持っていなかった。

「ナオ、もう一つ、大事なこと聞いてなかった」

「なんだ」

「禍物は人の体を借りてるんだよね？ 禍物かどうかって、どうやってわかるの？」

「まがたま禍玉が反応するはずだ」

「…そう」

蒼馬の視線は、ある一方向に固定されている。もっと正確に言う
と、向こうで街を見下ろしている人影に。

「じゃあ、ここに禍物はいない、ってこと？」

その人影が、ゆっくりと顔を二人に向ける。

「いや…、ここにいるとしか考えられないんだが…。何が言いたい
？」

「うん、その…、なんか、その、人がいるんだけど」

「ばか、早く言え！」

ナオは素早く振り返り、禍玉をかざして蒼馬の前に出る。けれど、

「…いくらなんでも、この距離で反応しないなら禍物ではなさそう
だが。おい、お前はなんでこんなところにいる？ 逃げ遅れたのか
？」

人影は動かない。逆光で顔は影になっていて、白目だけが光って
いるように見える。その視線はナオたちを見ているのではなく、た
だまっすぐ前を見ているだけのようだ。

「蒼馬、ここにいろ」

そう言うと、ナオはゆっくりと人影に近づいた。人影は、二十五
歳くらいの男。真面目そうな顔立ちで、髪は乱れているけれど、も
ともとはきっちり分けられていたようだ。

「ここは危険だ、非常階段で逃げろ。…怪我でもしてるのか？」

目は開いているけれど、こちらの言葉は聞こえていないようだ。

「おい、聞こえてるか」

ナオがその男の肩を叩いたその瞬間、

握りしめていた禍玉がまがたまが一斉に光った。

「禍物！」

ナオの叫びに応じるように、人影が鋭く腕を振る。ナオが飛び退
くと同時に床を切り裂くように衝撃が走って蒼馬に向かう。

「蒼馬っ、かわせ！」

「う、あっ！」

蒼馬は一瞬で煙に包まれた。

「蒼馬っ！」

蒼馬は、腕を前に突き出して立っていた。その手に持っていた護符が、ガラスのように碎けて消える。

「はは…、助かった」

「護符に頼るな、かわせるときはかわせ！」

「わかってるけどっ！ ナオ、後ろ！」

禍物が信じられない速さでナオに近づき、腕を振り下ろす。ナオが飛びのき、床が碎ける。

すぐに振り返った禍物は、蒼馬に向かって衝撃波を放つ。

「うわはあっ！」

転びながらもなんとかかわすと、背後のガラスが吹き飛ばされた。ごうごうと強い風が吹き込んでくる。

蒼馬が立ち上がると、

目の前に、禍物が立っている。腕を上げ、蒼馬に狙いを定めると、そのまま振り下ろした。

禍物の腕は、蒼馬がとっさにかざした護符にはじき返される。

続けて迫ってきた禍物の頭に、まよりタワーの置物が当たった。

ナオが投げたものだ。

「禍物！ お前は…ツヌイだな。これで何回目だ？」

その隙に蒼馬が逃げる。滑り込むように、自動販売機の影に隠れた。

「いてて…」

肘も膝も、固い床に打ち付けてしまっていて痛い。

いざというときは囧に、なんて怖くてできやしない。結局逃げ回ってばかりだ。

恐る恐る顔を出すと、ナオと禍物が向き合っている。ナオは護符と禍玉を構え、間合いを計っている。まがたま

蒼馬がまばたきした瞬間、禍物がナオに飛びかかる。ナオはぎりぎりでかわし、護符を禍物に叩きつけようとする。ナオの腕が空を

切ると、今度は禍物が衝撃波を弾き出す。それは蒼馬のすぐ近くの壁を突き破り、鋭い破片をまき散らす。蒼馬は頭を覆った。

ほんの少しの静寂。けれどそれはすぐに破られ、タワー全体を揺さぶるような激しい響きが蒼馬を襲う。

「ナオ、どこ？ 大丈夫？」

禍物もナオの姿を見失い、ゆっくりとあたりを見回す。

蒼馬の所から、ナオの姿が見えた。

「ナオ！」

暗がりにも身を潜めたナオが、しっ、と人差し指をくちびるに押し当てて蒼馬を黙らせる。

——ああ、僕は、

柔らかそうなくちびるにそっと添えられた白い指は、ナオの意図とは別の理由で、蒼馬の言葉を遮った。

——鈴木さんに好かれたいなんて贅沢は言わないよ。せめて、ナオは、緊張で乾いたくちびるを舐めて潤わせ、もういちど指を当てて蒼馬に合図した。

——僕は、せめてあの指になりたい。

ぼんやりとそんな妄想にひたっている。

ぞく、とナオの背筋に寒気が走ったのは、決して禍物が近づいているせいではなかった。

けれど、禍物の背中が視界に入って、やっと蒼馬は（少しだけ）正氣に戻った。

「まっ、禍物！ こっちだ！」

禍物は、ぎん、と振り返り、その足先を蒼馬に向けた。

禍物が一步、蒼馬に近づく。蒼馬は護符を握りしめる。ごくり。

ゆらり、ゆらり、

禍物が歩み寄る。

「あ…、あ…」

禍物が蒼馬に気を取られているのを物陰から見ていたナオは、そ

の体の限界に近い力で禍物の背中に向けて走り出した。

禍物は靴音に気づいて振り返りざまに衝撃波を放つ。それを読んでいたナオは飛び上がり、そのままの勢いで禍物の懷に体ごと飛び込み、胸の中心に護符を貼り付け

ようとした瞬間、

「スト~~~~ップっ！」

「なっ」

突然の甲高い声に、ナオはタイミングを逃した。

「おうっ、とっ、はっ、くっ」

意味のない言葉を短く発しながら、バランスを崩したナオは片足で数回跳ねたあと、ぺたんと尻餅をついた。禍物がゆっくりと腕を上げる。

「…やばっ」

禍物の腕が、見上げるナオを薙ぎ払う。

「ぐふっ！」

直撃を食らったナオの体は大きく横に吹き飛ばされた。その放物線の跡を引くように数枚の護符が連続して空中で碎け、きらきらと細かい塵になって降る。最後に、床に叩きつけられたナオの手に握られていた護符が碎けて消えた。

「ナ：ナオっ、大丈夫？」

再び物陰に隠れた蒼馬は目だけを出して、ぴくりとも動かないナオに呼びかけた。

「ナ：ナオ？」

「う：ううう」

「ナオ、その…、パンツが見え」

「うわあっ、見るな馬鹿っ！ あいたたた」

ナオは弾けるように立ち上がると、手近な柱の影に転がり込んだ。

「大丈夫？」

「んー、護符のおかげで大きな怪我はしてない。…護符をほとんど使い切ってしまった、危なかったな。ところで、」

柱の影から、叫ぶ。

「誰だ、邪魔したやつは！」

声のした方を見ると、ガラスの破れたあたりに人影が見える。

街の炎を逆光に、吹き込む風に暴れる髪を気にもせず、

長い白衣の裾をはためかせ、その心の強さを表すようにまっすぐに立つ、ちんちくりんな姿。

先に気づいたのは、蒼馬だった。

「保健の、ち、ち…、ええと…保健の先生？　なんでここに？」

「はあ、はあ、はあ、すず、すず、はあ、はあ、」

「危ないぞ！　入ってくるな！」

「はあ、はあ、だい、じょぶ、はあ、はあ、」

話にならない。ナオと蒼馬は千木田先生の息が整うまで待つしかなかった。

ツヌイは三人から興味をなくしたように展望室の外を向き、街を見下ろす。そして深く息を吸い込むと、大きな叫び声を上げた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

「うわ」

「なっ」

「ぴゃ」

同時に、ずずん、とタワー全体が揺れる。直後、街を直線で切り裂くような爆発が連続して起きた。

「ナオ、やっぱりツヌイのしわざだったんだね」

「間違いない、が…、あんた、もう話せるか？　何しに来た？」

「ん、はあ、お待たせ。ええとね、今日の鈴木さんがいつも以上におかしかったこと、」

「いつも以上って…」

「それから、自然とは思えない現象が起こっていること。それで何かあると思って、現象の中心部であるこのタワーに来てみたの」
「得意げに胸を張っている。蒼馬が「初めてのおつかいから帰ってきた子供みたいだ」と思ったのは内緒だ。」

「ほらナオ、闇雲に走り回ってたのはナオだけだよ」

「うるさいな」

「そしたら、下に紀乃月ヶ原さんがいて、二人が上にいるっていうから。でね、そいつ、まだ封印しちゃダメ」

指さす方に、禍物がいる。こちらを向いているけれど、ゆらゆらとしているだけで攻撃してくる様子はない。

「ダメって…あんたに何がわかる、そいつは」

「ふふん。あなたこそ、何がわかってるのかなあ？ 例えば、ツヌイの封印のしかた、とかは？」

「…あんた、どうして禍物の名を」

先生は、白衣のポケットに両手を入れたまま禍物に近づく。

「ツヌイは、こっちから手を出さなければ攻撃してこないはず」

「おいやめろ、危ないってば。ちよつ、やめっ」

慌てるナオにもお構いなし。先生はつかつかと歩み寄り、とうとう、禍物の横に並んで立った。

「ほらね、攻撃しなければ大丈夫なの。そうとわかれば、カワイイでしょ？」

ぽん、と禍物の肩を叩く。

「あ」と蒼馬。

「あ」とナオ。

「ん？」と先生。

ぶわ、と禍物が腕を薙ぐ。

「ぴぎゃ！」

先生はぎりぎりでしゃがんで腕をかわすと、蒼馬の後ろに転がり込んできた。

「あぶあぶあぶ、危なかった…」

「先生、何やってんだよ…」

「と…、とにかく、叩いたりしなければ大丈夫だから、ええと、ナオちゃん、だっけ？ こっちに来て。作戦会議しましょ」

第三章（2）

第三章（2）

ナオは警戒しながらゆっくりと大回りして蒼馬たちのところに来た。確かに、攻撃の意思を見せなければ大丈夫、らしい。

「で、あんたは何者なんだ？ ただの保健の先生じゃないな」

「ただの保健の先生だよ？ だけどそうね、たぶん、ナオちゃんの子孫か何か、かなあ？」

「あん？ なに言ってるんだ」

「先生んちに昔から言い伝えみたいのがあってね。世界を災いから救う呪文があるって、小さい頃からパパに教わってたの」

ナオと蒼馬は、信じられない、という目で先生を見た。

「先生――」

先に口を開いたのは蒼馬だ。

「まだお父さんのことパパって呼んでるの？」

「いやいや蒼馬、この際それはどうでもいいだろう」

「でも…」

「いいから。で、あんたが聞いた呪文ってのは？ 今から何千年も前の話だ、まともに伝わっているとは思えないが…」

「ええと、」

そう言ったきり、先生は黙り込んでしまった。

「…」

「…」

「…」

「ええと、忘れちゃった」

てへ、と舌を出して頭をコツンと叩く仕草は、いい大人がするものではない。それでも、この先生にはよく似合う。かなり腹立たし

くはあるけれど。

「忘れたって…」

「でも、大丈夫！」

すつくと立ち上がり、禍物と目が合って慌ててしゃがんだ。

「ちゃんとしてブログに書いておいたの！ 携帯で見れば…。あれ、

圏外…？」

「まあ、ここいら一帯停電してるしね」

「どうすんだよ、作戦会議とか言ったのはあんただろう」

ナオに詰め寄られて、先生はたじろいだ。

「だ、大丈夫。いま思い出すから。ええとええと、マグムヌ…マグムヌ…。うん！」

思い出して、ぼん、と手のひらを叩く。幼く見えるけれど、いわゆる昭和アクションもそつなくこなす先生だ。先生は目を閉じ、人差し指を立てると、厳かに口を開いた。

「マグムヌツヌイサクバヌル、デーチナサクヌル」

ぴく、とナオが片方の眉をつりあげる。

「ナナシソル、イシナツヌイヌク、マグムヌハナルシヌタグヌル」

蒼馬はきよんとしている。意味がわかるようなわからないような、不思議な響き。

「ハナツヌイホウヌルク、ハナルシニングルシ、ハナホウヌルクハナルシ。…どう？」

言い終わると、先生は得意げにふんぞり返った。蒼馬が「初めて九九を間違えずに言えた子供みたいだ」と思ったのは内緒だ。

「保健の先生、あんた…」

「ふふん。見直した？」

「あんた、発音悪いなあ…」

「にやにやつ！？」 仕方ないでしょつ、聞いて覚えた訳じゃないんだから！」

「先生、今のは？」

「これが、パ…お父さ…父から教わった言葉。この世界を救う呪文

なのよ」

「すごいな…、どういう意味？」

「え？」

先生のω型の口が、「知らないけど、それが何か？」と言っているようだ。

「先生…、意味は教わってないの？」

「う…、うん。でも、ナオちゃんにはわかるよね？　ね？」

「まあ、なんとか。ええと、」

ナオは注目されて、なんとなく恥ずかしくなつて視線をそらした。「禍物ツヌイは盛り、大地の匂い。ただしそれは、ツヌイではなく場所？で、禍物ハナルシだった。ツヌイの鼻に放り込んで？ハナルシがぐるぐる回して？最初はハナルシが掘った」

「…？」

先生と蒼馬が首を捻る。ナオは不服そうに言った。

「さっき先生が言ったのはだいたいこんな感じだ。発音が悪すぎて意味がわからん」

「うにゃ…、じゃあ、先生ってひょっとして…、役立たずかなあ？」

泣かれそうになって、ナオが慌てて取り繕った。

「いや、大丈夫、大丈夫だ。だいたいわかったから。『禍物ツヌイは大地を裂く。ただしそれは禍物ハナルシに操られてのことだ。ツヌイを封じようとすればハナルシが逃がしてしまうから、まずハナルシを封印しなさい』だな」

「なによ、聞き取れてたんじゃん！　ナオちゃん、いじわるだあ…！」

「このあたりにもう一体禍物が…ハナルシがいるってことか」

もう一体、と聞いて、蒼馬は怯えるように辺りを見回した。ナオがその不安を取り除く。

「大丈夫、ハナルシは弱い禍物だ。それ自身は弱いから、本能的に攻撃することしかできないツヌイを操って災いを引き起こすんだな。で、暴れてるツヌイを先に封印しようとすると、その直前にハナル

シが逃がしてしまう、と」

——そういえば、

思い当たることが、ナオにはあった。このツヌイには、何度か遭遇している。封印しきれず逃がしてしまって、それは自分の力が足りないせいだと思っていた。

——しかし、ハナルシも何度か封印しているはずだが？

「で、先生、近くってどこ？ この展望室の中？」

「さあ？ そこまでは…」

「とりあえずさ、探してみようよ」

「…そうだな。見つけたらすぐ知らせろ。蒼馬はあっち、あんたはあっち」

先生は、むうっとむくれた。

「あんたあんたって、仮にも先生なんだからそんな呼び方やめなさいっ」

「そうか、仮にも先生だったな、仮にも。じゃ、保健の先生はあっち」

けれど、リスのように頬を膨らませたまま、先生は動こうとしない。

「…なんだよ」

「保健の先生、保健の先生って…。ひょっとして、先生の名前、知らないのかなあ？ そうだよ、保健の先生って、影薄いもんね…」

先生の目が潤む。なんだか小さい子を泣かせてしまったような罪悪感に、ナオは慌てた。

「いや、だって、わたしは今日初めてここに来たんだ。知らなくて当たり前だろう。でも蒼馬なら知ってるよな？」

「ぼっ、僕？ 僕はほら、ええと」

「やっぱり、知らないのかなあ？ ぐしゅ」

「僕は、そうだ、人の名前を覚えるのが苦手なんだ。シィさんの名前だって、ええとええと、きねつき…だっけ？ ははは、ほら、覚えてない」

「っ、じゃあ、教えたげるから忘れないでね？ 先生の名前はジリリリリ！」

「ジリリリリ？ あ、その電話が鳴ってる。こんなときに…？」

「にゃあっ！ もうっ、なんで邪魔するのかなあ！？」

「おい蒼馬、お前出てみろ」

「え、やだよ怖いもん」

とは言ったものの、逆らえるわけがない。恐る恐る受話器を上げた。

「はい…。まよりタワー展望室でございます」

「意外としつかりした対応ね」

「この場にはそぐわないがな」

『ああ、蒼馬か。あたしだ』

「あ、きねつき…じゃない、シイさん？」

シイの名前を聞いて、蒼馬の持つ受話器に保健の先生とナオが耳を近づけた。

どちらからだろう、ふう、と花の香りが蒼馬の頬をくすぐる。

——ああ、なんか…、いい匂いだ…。

ちら、と横目で見ると、すぐそこに先生の顔がある。驚くほど小さな顔、大きな目、少し尖らせたくちびる。蒼馬はどきどきしながらしばらくの間見つめていたけれど、ふいに先生と目があって、慌てて視線をそらした。

——この至近距離で上目遣いって…、きつ、危険だ…。
どきどきどき。

『おい聞いているのか蒼馬！』

「…え？ ああ、ぜんぜん聞いてなかった。ゴメン」

激怒するシイの罵詈雑言がやむまで、三人は受話器から離れるしかなかった。

「で、なんで電話が通じるの？」

『そりゃあ、非常用の電話だもん、停電してても使えなきゃ意味ないだろう。で、』

ごそ、と受話器を持ちかえる音がする。

『さっき気づいたんだけど、事務所に変なヤツがいるんだよ』

「変なヤツって？」

『ずっとしゃがみっぱなしで、ブツブツ何か言ってるんだ。呼びかけても答えないし、気持ち悪いんだけど』

「それ！ ハナルシじゃないかなあ？」

先生がさらに顔を近づけて、蒼馬の脈拍が早くなる。

ナオは少しムツとして、受話器を奪うように引っ張った。

「シィ、そいつの背中、蹴飛ばしてみろ」

『え、いやそれは人としてどうかと』

「いいから。禍物に憑かれてるとしたら、早く追い出した方がその人のためだ」

『そ：そうか？　じゃあ：ちよつと待ってろ』

受話器から保留音が流れた。

安っぽい電子オルゴールの音に三人は聞き入る。

やがて、てんてろりろりん：というメロディーが頭にこびりついた頃、不意に保留音が途切れた。

『あー、今、その人の近くに移動した。蹴るぞ？』

「ああ」

『あの、蹴りますけどね、あの、ナオモドキってやつがそう言うてるんで。あたしは悪くないですからね？』

「いいから早くしろ」

『せーの：、うらあっ！』

どすっ、という鈍い音に続いて、がらがっしょんと様々な物が落ちて散らばる。

「そんなに思いきり蹴らなくてもいいんだよ！　軽くでいいんだ軽くで！」

『そういうことは先に言え！　：ん？』

「どうした」

『きゃー！』

喜びの悲鳴、とても言うのだろうか、普通のシィからは想像もできないような声が聞こえてきた。

『口からなんか出てきた！ 黄色くて丸くてフワフワで、あつ、弾んでる弾んでる！ ぷよぷよしてるぞこいつ！ あ、目がある目が！ ちっちゃい目だ、こっち見てるぞ！ ああもう、かわいいなあかわいいなあ！』

「あー、やっぱりあれか」

『ん？ 知ってるのか？ ああつ、今鳴いたぞこいつ！ キュウだつてキュウ！ おい聞こえるか？ キュウって鳴いて首かしげたぞ！』

「あー、うん、まあ、ハナルシっていう禍物だけど、単体じゃ何もできないヤツだから危険はないだろ」

禍物のかわいさにメロメロな感じのシィに対して、ナオは冷静そのものだ。

『ああもうああもう、おいナオモドキ、これ触って大丈夫かな？』

このフワフワの毛、触ってみたいんだけど』

「やめとけ。いちおう禍物なんだ」

『そうか…。ざーんねん』

見かけによらず、シィは猫だの犬だの、動物が好きだ。小さければ小さいほど、フワフワならフワフワなほどかわいい、というのが彼女の持論だ。

「で、シィ、護符はまだあるか？ さっき渡したやつ」

『ああ、まだ使ってない。だいいち、ホントに使えるのか？ これ』
パステルカラーで、アニメのキャラクターがちりばめられていて、丸っこい文字の呪文が書かれている護符。

ナオ自身、実際に使ってみるまでは不安だったのだから、シィが疑うのも無理はない。ナオは、シィの失礼な物言いに腹を立てることはなかった。

「それで封印用の護符を作る。お前が封印しろ」

『なに？ 封印って、素人でもできるの？』

「弱い禍物なら護符の力だけで十分だ。そうじゃなかったら、神社で護符を授かる意味がないだろ？　ダメもとでやってみろ、ダメだったらわたしが下りて行くから」

とは言ったものの、あの階段を下りて、また登ってくると思うとウンザリする。うまくいってほしいものだ。

『ふーん。おもしろそう。で、どうすんの？』

「護符の呪文に、封印、と書き加える」

シィはその続きを待ったけれど、ナオが口を開く気配はない。

『…それだけ？』

怪訝そうに確認するシィの口調は当然のものだったけれど、ナオが口を尖らせたのも当然だ。

「それだけだよ。お前に渡してあったのは、いわば汎用の護符だ。そのままなら万能の護身符だけど、特定の用途を書き込めばその効果が強くなる。封印専用の護符に比べれば弱いけど、ハナルシには十分だろ」

なるほどね、とシィはつぶやく。完全に理解できたわけではないから、あまり大きな声にはならなかった。

『書くもの書くもの…ああ、ひどい散らかりようだな。いったい誰がこんなことを』

「お前がさっきやらかしたんだろう」

ナオが軽く頬を緩ませる。受話器から漏れ聞こえるシィの言葉は明らかにナオとの掛け合いを期待していたし、ナオは自然にそれに応じた。本人たちはどう思うかわからないけれど、傍目に見たらいいコンビだ。

『この護符にはピンクの蛍光ペンが似合うと思うんだけど、どうだろう？』

パステルカラーで、アニメのキャラクターがちりばめられていて、丸っこい文字の呪文が書かれていて、その横にピンクの蛍光ペンで「封印」と書き加えられた護符。

——ピンクはさすがに…。いや、問題ない、はず。

「…好きにしろ」

『ええと、日本語でいいのか？ 漢字で』

「ああ。大事なのは、念を込めて書くことだ。封印することを念じて書けば、何語でも問題ない。お前が普段使っている言葉の方が、念がこもりやすい」

『なるほど。ええと、』

しばらくの間、声が途絶えた。

「シィ？ 書けたか？」

『いや、あの、…封印の“ふう”って、どういう字だったっけ』

「お前…、ええと」

シィを非難するような言い方をしたけれど、ナオも漢字には弱い。蒼馬が横から口を挟んだ。

“土”が二つに“寸”だよ」

『あー、思い出した。“封”な。で、…封印の“いん”は？』

「ええと、こう、斜めに一本あって、そのまま下に…説明しにくいな」

「いいよ平仮名で。重要なのは念じることのほうだ」

『そうか、じゃあ…。いん、と。できた』

ナオは、なるべく想像しないようにした。けれど、パステルカラーで、アニメのキャラクターがちりばめられていて、丸っこい文字の呪文が書かれていて、その横にピンクの蛍光ペンで「封いん」と書き加えられた護符。

大事なのは念だ。見た目じゃない。けれど、

—いくらなんでも酷すぎる。

ナオは、今日何度目かの溜息をついた。

『なあ、ナオモドキ』

「…なんだ」

『あたしは素人だから、見当違いかもしれないけど』
少し遠慮がちに、間を置く。

『護符ってのは、白い和紙かなんかでできてて、墨で鋭く文字が書

かれてて、なんかこう、神秘的な感じがするものだと思うんだ』
相づちを待つけれど、ナオは何も言わない。

『これは、いくらなんでも酷すぎないか？』

ナオは口を堅く閉ざしていた。うっかり口を開いたら、「ごもつとも」と言ってしまうそうだったから。せめて漢字で「封印」と書いてくれれば、とは思ったけれど、それで決定的に状況が好転することはないだろう。

シィは、ナオの答えを諦めた。

『で、これをどうするんだ？』

「禍物に貼る。言っとくけど、テープとか糊とかはいらないからな」
『わかった。ちょっと待ってろ。これを…、ほら、こっちおいで。チツチツチツ。おいでおいで。お姉ちゃんがいいものあげるから。よーしよし。あ、指噛まれた』

「大丈夫か？」

『甘噛みだよ甘噛み。かわいいなあ、ノド鳴らしてるよ。で、このフダを貼るんだな。…ペた、っと』

「どうだ？」

『うーん、邪魔そうに振り払おうとしてるけど、それ以外、特に変わった様子は…。あっ、悶えだした』

「効いたか？」

黄色くて丸くてフワフワな禍物・ハナルシは、徐々に苦しみに飲み込まれる。身もだえしながら、黒いつぶらな瞳で、助けを求めるようにシィを見つめた。

『あっ、そんな目で…あん、見ないで、見ちゃダメ』

蒼馬はなんとなく頬を赤くする。

ハナルシの体が小刻みに震え始める。憐れみを乞うように、シィを見上げる。

小動物にこんなふうに見上げられたら助けたくなってしまう。シィは必死でその欲求に抗った。

『いやッ！ ああん、そんな…。ダメ、ダメッ！』

三人は、息を殺して聞き入っている。

「そ：蒼馬君はこういうの聞いちやダメじゃないかなあ…」

「先生、へんなこと言わないでよ。…考えすぎだよ」

「しーっ、静かにしろ、いいところなんだから」

「いいところって…」

いま護符を剥がせば、まだ間に合うかも知れない。ハナルシは、キュウ、キュウ、と震えながら悲しそうに鳴いて、シイの足もとにすり寄る。

「シイ、剥がすなよ。もう少しだ、剥がしたら負けだ」

『ダメ、そんな…、そんなところ…。ダメだったら。あん、ああん』

「シイさん、もう少しだからガマンしてね、シイさん」

『まだ？　ねえ、まだなの？』

「シイさん、もう少し、もう少しだよ、シイさん」

『ああん、もうダメ、もうダメ』

「シイさん、シイさん、シイさん！」

『ダメッ、あ、ああッ』

「もうちよつと！　もうちよつとだよシイさん！　はあああ」

「おい蒼馬、それやめろ。なんだか…」

「ご：ごめん。つい興奮して」

『ああっ、もう…！　あ、消えた』

「うまくいったか。なんか、ガラス玉みたいなの落ちてないか？」

『ガラス玉？　ああ、あった』

「それが封印された禍物だ。先生、あとで近所の神社に持って行ってくれ」

「了解☆」

片目を閉じ、舌を出して敬礼する先生をひっぱたいたナオを責めることは、誰にもできないだろう。

「あとはこっちのツヌイを封印すれば終わりか。…ハナルシほど簡単じゃないけどね」

『そうか、じゃあ…ナオモドキ、その…』

「なんだ」

『気を付けてな』

「…気持ち悪いな」

『なんだと？ 人がせっかくおま』

ナオは最後まで聞かず、がちやつ、と乱暴に受話器を置いた。

「さて、」

ゆっくりと立ち上がり、禍物ツヌイを睨みつける。

「次はあんただよ」

第三章（3）

第三章（3）

「蒼馬、護符はあと何枚ある」

「ええと、三枚」

「ここから動くなよ。その護符で先生を守れ」

「…わかった」

ナオはゆっくりとツヌイに近づく。

——さっき、先生がしたように。

ぎりぎりまで近づいて、封印の護符を貼れば…。

けれど、

ツヌイはナオを目で追う。それは先生の時とは違って、警戒しているようだった。

ひと飛びで懷に飛び込めるくらいに近づくと、

ツヌイが弾けるように飛び退く。両手を鞭のように振るい、衝撃波がナオを襲う。

「くうっ！」

なんとかかわしたけれど封印の護符は碎けてしまった。致命傷に近い傷を防いでくれた。

「しまった、封印の護符が」

たて続けに衝撃波が見舞われる。ナオは飛びのき、転がり、なんとか逃げる。

「なんか、さっきより激しくなっていないかっ!？」

「ハナルシを封印しちゃったから、本能のままに暴れてる…ってとこかなあ？」

「よけいタチ悪いじゃないかっ、うわっ！」

ナオが身を寄せていたジュースの自販機がはじけ飛ぶ。破裂した

ペットボトルから、ジュースが床に広がる。

「ナオっ！ 護符はまだある？」

「護符は、うわっ」

床のジュースで足を滑らせたナオに、ツヌイが襲いかかる。ナオの腹めがけて突き出された拳はなんとか護符で受け止めたけれど、勢いで体ごと弾き飛ばされ、壁にたたきつけられた。

「ごふっ！」

「ナオ、ダジャレ言ってる場合じゃないよ！」

「うるっさい、ばか！」

続けざまに放たれる衝撃波を、ナオは飛び退いてかわす。

「護符は…あと…一枚か、蒼馬、紙くれ紙！ 護符を作る！」

「紙なんて…先生、何かない？」

「レシートならあるけど…」

「それでいい、くれ！ あと書くもの！」

「ナオの後ろ、売店があるよ！ ボールペンくらい、あるんじゃないかな」

振り返ると、少し離れたところに土産ものの売店がある。

「ナオっ、援護するからその隙に走って！ おい禍物！ ええと、

タ…タ…、チ…」

「ツヌイ」

「ツヌイ、こっちだ！」

あちこち衝撃波で壊されているから、投げるものはいくらでもある。蒼馬は手近な塊をツヌイに投げつけた。

「グアッ！」

小虫を払いのけるような動作で、ツヌイが衝撃を放つ。

「ぎゃんっ！」

「うあっ！」

先生と蒼馬の間を衝撃波が走り抜ける。

「蒼馬君っ、ツヌイの気をそらすだけで良かったんじゃないかなあっ!?!」

「蒼馬、紙っ！」

「はいよっ！」

蒼馬が先生の財布をむしり取って投げる。

「ぎゃあんっ、あたしのおサイフ！ リオンさまぁっ！」

「ご…ごめん先生、つい…。リオン様？」

ピンク色のかわいい財布が、荒れた床面に無惨に叩きつけられる。ツヌイの放った衝撃波が跡を追ひ、財布をかすめる。床のタイルと一緒にはじき飛ばされ、先生の財布はナオの足元に落ちた。

「ええとレシートレシート…、あった」

「リ、リオン様は無事！？」

「あ…、いや、その…、だ…大丈夫、大丈夫だ」

「！ うわあん、リオンさまぁ」

先生は蒼馬の胸に顔を埋め、ばかばかばか、と叩く。

蒼馬は、

——なんか…、こういうのって…、いいなあ…。

と、どきくさにまぎれて先生を抱きしめてみたりした。

「うっわ、四百円か、高いなー」

「どしたの？ ナオ」

「いや、ボールペン、一番安いので税込み四百円もするんだよ」

「非常時なんだからお金は払わなくても…」

「ばかつ、いいか、そういうのを火事場泥棒と言ってだな、もっとも卑怯な、んぎゃっ！」

「ナオっ！」

もうもうと立ちこめるホコリで、一瞬ナオの姿が見えなくなる。

「ケホ、とにかくそんなのはダメだ！」

「試し書きだと思えば…」

「買うつもりもないのに試し書きなんてできるかつ！ 先生、四百円借りるぞ」

「うう…、ナオちゃん、返すつもりないくせに…」

「あ、細かいのがないな…。しょうがない、二千円で五本買おう」

取り出したのは、とっておきの貳千円札。

「いやああああ！ あたしの貳千円札うっ！ だめ、それだけはだめっ！」

「じゃあ一万円札でボールペン二十五本買うか？」

「ぎにやああああああん！ そんなに使いきれないよう…。ごっ、五本でいいです…。あたしの貳千円札…」

「先生、よく貳千円札なんて持ってたね…。僕、本物見たことないよ」

「ひっく、ぐしゅ…。今年のお年玉に、おじいちゃんがくれたの…」
「…まだもらってたんだ」

ナオは財布から取り出したレシートの裏に呪文を書き込んで、数枚の護符を作った。掲げると、コンビニのマークが透けて見える。

大丈夫、大丈夫、大事なのは念だ、と自分に言い聞かせながら二枚を手に残し、あとは財布に挟んだ。

「…よし。おいつ、ツヌイ！」

飛び出したナオに、衝撃波が向かう。床のタイルを切り裂きながらまっすぐナオに突き進む。

ナオは、レシートの護符を一枚、目の前に放った。宙で一瞬静止したそれを、突きだした両手で支えるように構える。

どう、と衝撃波が護符を直撃した。ナオの両腕に、凄まじい圧力がかかる。

「くうっ！」

——耐えられるか？

けれど、

レシートの護符に、ぴしりとひびが入った。

「！」

ナオは護符を残したまま、横に飛んだ。直後、衝撃波は轟音と共に護符を打ち破り、その先のガラスを吹き飛ばした。風の通りが良くなり、舞い上がった埃はすぐに外に流れていった。

「やっぱりダメだったか…。まあ、」

そう言うと、顔をぶるんと振って降りかかった破片を落とす。

「当たり前といえば、当たり前だな」

ナオは走る。

「蒼馬！ これで残りの護符をすべて封印の護符にしておけ！ やっぱりレシートじゃだめだ！」

そう叫んで、ボールペンと財布を投げた。

「了解っ！」と蒼馬。

「うあああん！ リオンさまぁ！」と先生。

ナオの後を、立て続けに三つの衝撃波が追いかける。蒼馬が封印の護符を書き上げるまでの時間稼ぎに、ナオは走る。

——うん？ 今まで気づかなかったが…、

ずいぶん足の運びが柔らかい。鈴木奈緒の体に染みついたこの走り方。

ひょっとして。

「ナオ！ 書けたよ！」

「よし、投げてよこせ！」

「投げるったって、風が強くて…」

「財布に入れて投げろ！」

「先生、あの…」

先生は黙って財布を差し出した。震えている。

ぎゅっと胸の前で握られた手には、なにか写真のようなものが収まっているようだ。

——あれが、…リオン様、かな？

まあ、それは後で。

蒼馬は護符を一枚だけ手元に残し、二枚を財布に挟んで投げた。

「いくよ、ほらっ！」

「よし！」

走りながら、今度は空中で受け止めるナオ。

財布から封印の護符を一枚取り出す。

蒼馬が書いてくれた封印の護符。それはパステルカラーではある

けれど、

——レシートに比べればだいぶマシだ。

必ず、これで、

仕留める。

ナオは鉄骨の柱に跳び蹴りを食らわすようにして体を反転し、まっすぐツヌイに向かって走り出す。一瞬、突然の反撃にツヌイが怯む。けれど彼の本能はそれよりも早く腕を振り抜く。一筋の衝撃波が床を割きながらナオに向かう。

「ナオっ！」

衝撃波にはじき飛ばされる、その瞬間。

ナオはレシートの護符を前方に放ると、軽く飛んでその護符の上につま先で乗った。衝撃波が護符を弾く。その勢いでナオは垂直に跳ね上げられる。ツヌイはナオを見失う。護符が砕けて透明に散る。ツヌイの頭上から、

音もなく、

ナオが舞い降りる。

「ツヌイっ！ これで終わりだ！」

とっさに見上げたツヌイは、しかし為す術もなく、

蒼馬が書き上げた、ナオの封印の護符をその身に受けた。

「ナオ、やった！」

一瞬の静寂、すべてが静止した展望室。

それは、風圧でめくれたスカートがはらりとしぼむくらいの、短い時間だった。けれど、

とても長く感じる、一瞬。

その静寂を破ったのは、ガラスが砕けるような、透明な音。

シャン。

「え？」

「ん？」

ツヌイを封印するはずの護符は、碎けて消えた。
慌てて飛び退くナオに、命拾いしたツヌイが襲いかかる。

「なっ、なぜだ？ 蒼馬、ちゃんと書いたのか！？」

「書いた…と…思う…けど」

ナオは逃げながら、財布に残った護符を取り出した。

「おまえっ、ばか！ ばか蒼馬！ 土をふたつ縦に並べるんだよ！
横に並べてどうすんだ！ その下に寸って…、こんな字はないだ
ろ、ばかっ！」

「あー、なんか変だと思った、あははー」

「あははじゃないっ、書き直せ！」

また先生の財布が宙を舞う。

けれどその中にはもうリオン様も弍千円札もない。先生はすべて
吹っ切れたような笑顔で、

「あのおサイフも、結構高かったのよね…」

と、宙を舞う財布につられ、ふらふらと前に出た。

「先生、危ないっ！」

「…え？」

衝撃波が、先生の体に直撃した。

ばりばりと床が裂け、砕け、弾け、先生の体もろとも高く跳ね上
がる。宙に浮いた先生の小さな体に、とどめを刺そうとツヌイが襲
いかかる。

「ツヌイッ！ 止まれ、お前の相手はわたしだ！」

けれど、

振り抜いたツヌイの腕が、先生の腹にめり込む。体はくの字に曲
がり、そのまま強化ガラスの窓に叩きつけられた。展望室の外に大
きく張り出すように角度がつけられているガラスは、先生の体を受
け止め、たわんで全体にひびが入った。

「先生ーっ！」

蒼馬が飛び出す。同時にツヌイが蒼馬に向けて衝撃を放つ。ぎり
ぎりのところでナオが滑り込み、最後の護符で蒼馬を守った。

歪んだ強化ガラスはめりめりと音を立てている。簡単に割れないはずのそれは、しかし次第に歪みを増し、とうとう砕け落ちた。大きく開いた穴から、先生の体が窓の外にずるりと滑る。

「ぐうっ！」

蒼馬はぎりぎりで先生の右腕を掴むことができた。白衣がばさばさと不吉な音を立てて羽ばたき、悪魔の呼び声のような風切り音が二人を包む。

「せんせえ……っ！」

意識を失った体は、信じられないほど重く感じる。先生の体が小さいとはいえ、それを一人で引き上げるのは難しい。けれど、

「うおおおおおっ！」

何とか引き上げることができた。その瞬間、砕けたガラスで足を滑らせ、

「うわあっ！」

今度は蒼馬が窓枠にぶら下がった。

窓枠にはガラスの破片が残っている。蒼馬の手は血まみれになり、それが腕を伝ってくる。

それでも蒼馬は、何よりも先に、先生が上に残っていることに安心した。

「ここから落ちたら……助からないよね……」

蒼馬は懸垂が三回しかできない。さっき先生を引き上げるのになり力を使ったから、

「チャンスは一回っ！ ふぬううううっ！」

腕が悲鳴を上げる。指にガラスが食い込んで、けれど不思議と痛みは感じない。

右足を床に上げ、なんとか這い上がったと思った瞬間、目の前を衝撃波が通り抜けた。

「ぐっ！」

思わず顔を背けた蒼馬の体は、再び窓枠にぶら下がった。

「あ……」

蒼馬は場違いな苦笑いを浮かべる。

自分の手から落ちた血の滴が顔に落ちる。

「もう、ダメかも。あはは」

笑いながら、けれど、目に涙が浮かぶ。

先生は、生きてるかどうかもわからない。

ナオは、もう一枚も護符を持っていない。

僕は、だから、もう、落ちるしか、ないのかな。

でも、

「蒼馬あつ！ 生きてるか蒼馬あつ！」

僕は、

「這い上がれ！ 這い上がれ！ 這い上がれっ！」

ナオを、奈緒ちゃんを、

「わたしを守るんじゃないのだったのかっ！」

守ると、

「約束したんだろーっ！」

約束したんだ。

「くうううっ、ぬがあつ！」

蒼馬は一気に自分の体を引き上げ、展望台の中に転がり込んだ。

「はあっ、はあっ、はあっ、先生っ」

蒼馬の呼びかけにも、先生は応じない。開いたままの目と口が、絶望という言葉を呼び起こさせる。

「蒼馬、無事だったか！」

「無事じゃないけど、とにかく先生を安全な場所に移すまで、タタタ：そいつを引きつけてて！」

「わ：わかった」

どんな怪我をしているかわからない先生を下手に動かしたらまずい。蒼馬は床に落ちていたテーブルクロスのような布に先生を乗せ、

ずるずると引きずって売店の奥に移動した。

「先生、死んじゃだめだ!」

蒼馬は先生の胸に手を置き、心臓マッサージを始めた。――“あの事故”のことを知ったあと、何度か講習を受けて、やり方はよく覚えていた。

第三章（4）

第三章（4）

ナオは護符をすべて失い、封印するすべもない。ただ逃げるだけだ。その視界の端に、横たわる先生の姿を捉える。

――すまない…。

不用意に財布を投げた、わたしの責任だ。

その前に、先生のレシートを使おうなどと考えた、わたしの責任だ。

それよりも前に、先生がここに入ってくるのを止めなかった、わたしの責任だ。

それよりも、それよりも前に…。

ナオの目の前を衝撃波が走る。ナオは半ば無意識でそれを飛び越え、逃げる。

今まで、多くの人が犠牲になるのを見てきた。けれど、それは自分とは関わりのない人々で、

そうだ、先生は、

共に、闘っていた。なんの力も持たない先生が、わたしと、共に。ナオの視界がゆがむ。

そんな場合じゃない、今は禍物を封じて、それが終わったら泣けばいい。けれど、

視界の端に焼き付いた、横たわる先生の姿は、

鈴木奈緒の心を残酷に貫く。涙が止まらない。ナオは立ちこめる埃に紛れて、カウンターの裏に転がり込んだ。

ナオを待っていたように、そこには先生の財布があった。明るいピンク色のそれは、けれど傷つき、引き裂かれ、痛々しい。ナオは財布を拾いあげて胸に抱いた。

「ひっく、うっ…、ひっく」

涙を止めることはできなかった。

——精神の制御は難しい。浅いところにいるわたしを、深いところにいる奈緒が拒絶する。

けれど、わたしが奈緒本人だったとして、

泣きやむことができるだろうか？

先生、先生、先生、

わたしのせいで。

どうしてこんなことになった？

わたしが自己を過信し、

わたしが禍物を放って。

わたしが護符を使い切り、

わたしが先生の財布を借り、

わたしが先生の財布を投げて、

すべて、

すべて、わたしの、せい。

「ああ、もう…」

ナオの心を支配するその感情を、ナオは自然に受け入れることができた。

壁にもたれかかり、ずるずると這うように立ち上がる。

「ツヌイ…、ツヌイ…！」

思い切り息を吸い込み、すべての力を使い切ってもいい、それくらいのもりで叫ぶ。

「ツヌイっ！ わたしはここだ…！」

ナオを見失っていたツヌイが、ナオに迫る。飛び上がって大きく右腕を振り上げ、

ただ棒のように立って見上げるナオに、

その腕を、

振り下ろす。

——終わった。

すべてを諦めて焦点の合っていなかったナオの目は、けれどその視界を遮った者の姿を捉えた。

それは、

蒼馬。

「ぐうっ！」

蒼馬の体を通して、ずしん、と床に衝撃が突き抜ける。ツヌイを受け止めた両腕の先にあるものは、

――レシートの、護符？

「んううううっ、」

レシートの護符は、砕けることなく耐えている。

「信じろ、信じろ、信じろ！」

徐々に押し込まれる蒼馬だったけれど、

「はあっ！」

蒼馬の気合いと共にツヌイは弾き飛ばされた。

それを見届けるように、レシートの護符が、シャン、と砕ける。

「蒼馬、お前…、そんな弱い護符で」

言い切る前に、蒼馬はナオの頬を叩いた。思い切り。ナオが頬を押さえると、蒼馬の血がべっとりといっていた。

「ナオ…、今、死のうとしてたでしょ？」

「蒼馬、…でも」

「ふざけんなっ！」

蒼馬の勢いに、ナオは、びく、と体を硬直させる。

「こうなったのは誰のせいだよ！ ナオのせいだよ！？」 街が壊されて、大勢の人が死んで、先生もあんな酷い目にあって、」

突き刺さる、真実だけれど、あまりに厳しい言葉。

「奈緒ちゃんの体は無事に返すって言っただろ！？ なのに勝手に死のうなんて、」

震える声、

「ふざけんなっ！ 最後まで責任取れよっ！」

こぼれる涙。

——ああ、蒼馬、わたしに、

言葉は鋭いけれど、

生きろ、

と言ってくれる、

蒼馬。

ナオは蒼馬と頬を合わせる。

——やっぱりだ。

「ナ：ナオ？　僕は、その、怒ってるんだよ？」

——やっぱり、男の涙は熱い。そして、とても、

とても、

やさしい。

「わかってる。すまない……。そうだな、これはわたしの、」

封印の護符を手に、立ち上がる。今度は、自分の両足でその体を支えて。

「わたしの、罪滅ぼしだ」

「ナオ、見える……？」

「いや。ツヌイ……どこに隠れた？」

「まがたま禍玉は？」

「さっき引っかけて切れてしまった。どっちにしろあれは感度が鈍くて役に立たない」

柱の影から、ナオと蒼馬はあたりを伺う。動くものはない。

二人の手にはそれぞれ、護符が二枚ずつ握られていた。先生の財布から取り出したレシートの護符と封印の護符が一枚ずつ。もちろん、「封」の字は直してある。パステルカラーの護符は頼りなさげだけれど、レシートに比べればだいぶました。蒼馬の血が付いてしまい、若干だけれど、凄みを増した：気がしないでもない。

蒼馬は、護符をじっと見つめて言った。

「ナオ、僕が囧になる」

「バカ、やめとけ」

「：僕はそのためにここに来たんだ。そう言ったよね？」

ぐ、とナオは返事に困る。それはそうだし、それを少し期待していたのも確かだ。

「それに、先生の近くで暴れてほしくない。だから、このあたりにツヌイを引きつけるよ」

「先生の…。そうか、しかし、おい待て！」

蒼馬は聞かずに飛び出した。

「ツヌイ！ どこだよ、ツヌイ！」

「グアッ！」

「うわあっ！ 危なっ！」

一撃をかわされると、じり、じり、とツヌイが近寄る。

蒼馬は侮るべき存在ではないと、ツヌイは知った。最大限に警戒しつつ、蒼馬を壁際に追いつめる。もちろん、

もう一匹の人間への警戒は、怠らない。隙は、ない。

放たれた衝撃波に、蒼馬がレシートの護符で応じる。

「ぐっ…、ナオ！ 今だ！」

蒼馬はナオが隠れていたあたりに向かって叫んだ。けれど、

「あれっ？ ナオ？」

どう、と衝撃波が護符を破る。蒼馬はぎりぎりのところで転がり、かわす。

けれど目の前に立ちはだかるツヌイに気おされ、身動きが取れなくなる。

「ナ：ナオ？ どこ？」

返事はない。けれど蒼馬は、ごほん、と咳払いをすると不敵な笑みを浮かべた。

「ふ…、ツヌイよ。まさか僕が封印の護符を持っているとは…思わなかっただろう？」

声が震えてしまって、あまり迫力はない。それでも、封印の護符を見せられてツヌイは一瞬だけ怯んだ。蒼馬は、その一瞬を逃さな

かった。ツヌイの体に、護符を叩きつける。

「ツヌイっ、封印っ！」

「グアアアアア……ア？」

ほんのひととき見つめ合う、蒼馬とツヌイ。

ぱちぱち、と二度ほどまばたきをした後、蒼馬は首を傾げた。

「あれっ？」

蒼馬自身は力を持たないから、必然的に封印は護符の力のみに頼ることになる。封印専用の護符であれば、あるいはなんとかなったかもしれないけれど、

汎用の護符を封印用に改造しただけではツヌイには効かず、護符は切なげな響きを残して消えた。

二度目の命拾いに、ツヌイの腕は振り抜かれる。その指先は蒼馬の肩をかすめただけのはずなのに、蒼馬ははじき飛ばされた。

「いたた……っ。あ」

顔を上げると、そこにいたのはツヌイ。蒼馬の手には、もう護符は一枚も、レシートの護符でさえ一枚もない。

乗っ取られた男の表情は動かないけれど、蒼馬には伝わった。たぶんツヌイは、追いつめた獲物を嬉しそうに睨んでいる。すべての望みを絶たれた小さな人間の顔を、とても嬉しそうに、睨みつけている。

「あ、あ、あ……」

ツヌイが目の前の獲物に気を取られたその瞬間、物陰に潜んだナオがニヤリと笑う。

同時に、

ツヌイの背中に向かって走り出す。靴を脱いでソックスだけになった鈴木奈緒の足は、

——音を立てずに走れるとは……鈴木奈緒、まるで猫だな。

つま先と足首と膝の関節が、絶妙に衝撃を和らげ、足音を消す。厳しく育ててくれた母親に、感謝だ。

ナオが走りながら封印の護符を構える。風を切る護符の音にツヌ

イが反応し、振り返りざま、腕を横に払う。それはナオの顔面に直撃し、けれど封印の護符は、

ツヌイの胸の中心に、強く貼り付けられていた。

ナオの左手は、顔のすぐ横にレシートの護符を掲げ、ツヌイの腕を止めている。

レシートの護符が散ると同時に、ツヌイに憑かれていた男は崩れ落ち、口からガラス玉が転げ出た。

「はあ、はあ、はあ…、封印、完了だ」

「ナオ、やったね…。でも、どこ行ってたんだよ」

「ん？ 隠れて見た。お前が囧になると言っただろう」

「そりゃそうだけど…」

「作戦立てる前に飛び出したお前が悪…っ」

ナオが、がく、と膝をつく。

「ど、どうしたの？ 怪我？」

「いや…、眠い…」

蒼馬が、がく、とずっこける。

「心配させないでよ…、ってひょっとしてナオ」

「ああ、お別れだ。わたしはまた眠りにつき、…数百年後に禍物と共に目覚める」

ナオの笑顔が、とても寂しそうな笑顔が、蒼馬の心をきつく握りしめる。

蒼馬は、ためらいがちにナオの体を抱き支える。血で服を汚してしまふけれど、仕方がない。

「ナオ、もう…、会えないの？」

「ああ、わたしはただの通りすがりだ。もう二度と…。それよりも、先生には済まないことをした。謝っても謝っても、謝りきれない」

「…ナオはこの世界を護ったんだ。そんなに謝ることはないよ。僕こそ…、さっきは怒鳴ってゴメン。ナオが苦しんでることを知っててわざわざ怒鳴るなんて」

蒼馬は少しだけ顔を赤らめる。ふだん怒鳴る事なんてないから、

思い出すとなんとなく恥ずかしい。

くす、とナオは弱く笑う。

まただ。また最後の最後になって、許し、許されようとする。ただし、

わたしは決して許されることはないのだけれど。

それにしても、

ああ、

眠りに落ちる瞬間の心地よさは、

わたしの心に刺さったいくつもの棘を、

やさしく、やさしく、抜き取ってくれる。

わたしにたった一つだけ救いがあるとすれば、

今この時、

蒼馬がわたしを抱いていてくれること。

「また次も…、お前のような奴に会えるといいな、蒼…」

こと、とナオは眠りについた。ほんの少しの間を置いて、そのまぶたが再び開く。

「んん…、あれ？ 私…」

「ナ…奈緒…ちゃん？」

「えっ、なっ、何やってんのよ、放して、放してよっ！」

けれど蒼馬は、決して奈緒を放そうとはしなかった。

「奈緒ちゃん…、よかった、奈緒ちゃん…」

周囲の異状から、何かとんでもないことが起こったことはわかる。けれど、

体のあちこちが痛いし、蒼馬くんは血まみれで私に抱きついて泣いてるし、すぐそこに知らない男の人が倒れてるし、向こうに横たわっているのは…、たしか、保健の先生？

「蒼馬くん…、何が、あったの…？」

終章

終章

目覚ましのアラームが鳴り始めた。

ピピピピピ、と安っぽい音が響く。懸賞で当たったアニメグッズの目覚ましだから、機能的には以前使っていた時計よりも数段劣る。目覚ましをまさぐる手が、やっと裏の小さなスイッチにたどり着き、アラームを止めた。

「ん…」

少女は自分の胸に手を当て、記憶の中から拾い上げた自らの名を、慈しむように、詫びるように、つぶやいた。

「鈴木、奈緒…。んん？」

起きあがり、部屋を見回す。

視界がぼやけて、よく見えない。けれど、見覚えのある部屋。

ナオはベッドから下りると、机の上にあった眼鏡を着けた。

部屋の隅の雑誌の山は、さらに高くなっている。壁のポスターは何枚か貼り替えられているようだ。カレンダーは、“昨日から一年ほど後”を示していた。

「ありえない…わけではないが」

そうつぶやくと、明かりを求めてカーテンの前に立った。

どく、とナオの心臓が縮む。この薄布の向こうに広がっている光景は、おそらく、

壊滅的な打撃を受け、人々の挫折と苦悩の上に高く積み上げられた、がれきの山。

ナオは深く息を吸い、ゆっくりと吐いた。そして、一気に、カーテンを開けた。

「っな」

ここは真寄市のほぼ中心に立つ高層マンションの一室だ。かなり上の階にあり、この部屋からも真寄市全体を見渡せる。ナオは、ここからの都市の眺めに圧倒され、今、間違いない、

約一年の眠りから、覚醒した。

「なんじゃこりゃあ!？」

一年前に街が大きく破壊されたというのに、すでにほとんど元通りになっている。もちろん、さらにビルが増えていたり、ところどころ空き地があったりするけれど、とても大災害に見舞われた街とは思えなかった。ただ、

この街の下には、多くの犠牲が眠っている。見知らぬ大勢の人々と、

――先生が。

ナオはもう、自分の罪から逃げようとは思わなかった。

人々が街を再興し生きようとする限り、わたしはわたしの罪をすぐために、世を守り続ける。

「奈緒っ!　いつまで寝てるの!」

「はいっ!」

ナオの体は、その意志とは関係なく一瞬飛び跳ね、着地と同時に部屋を飛び出し、食卓に向かってダッシュした。

体とは正反対に、ナオの心は冷静に分析する。

――母親か。元氣そうでなによりだ。

食卓まで、二秒半。この体にもずいぶん慣れて、昨日よりだいぶ動きやすい。

食卓には、ナオと母親のぶんの朝食が用意されていた。マーガリンを添えたトーストと、ミルク。白い皿に映える青リンゴと、細く刻まれたハムを載せたサラダ。

――またバターが値上がりしたのか。わたしはマーガリンの方が好きだからいいけど。

ナオは頬を緩ませた。ただし、それは鈴木奈緒本人の嗜好だ。

ナオは、ちらりちらりと母親を見ながらトーストをかじった。去

年の今ごろ、禍物が現れて大きな騒ぎになった。鈴木奈緒は禍物と対峙していて避難所には向かわなかったのだから、きっと母親は心配しただろう。そう言えばあの日は朝から様子がおかしかった、と思われていないだろうか？　だとしたら、

また今日もおかしい、と思われるかもしれない。

しゃく、とリンゴを囓る。薄い皮がぷちんと弾け、みずみずしい果肉から甘い果汁が溢れだす。同時に刺激的な酸味が頬をつつき、目覚めたての味覚がいつせいに咲き踊る。それは果肉を噛み砕くたびに、衰えることのない波となって押し寄せた。

「ほむう…」

——そう、あの日もこの子は嬉しそうにリンゴを食べていたっけ。

「…グズグズしてると遅刻するわよ」

「あ、はい」

「行ってきます」

家を出ようとする奈緒を、母が引き留めた。

「奈緒…、ちゃん？」

「な…なに？　お母さん」

「ううん。——気を付けてね。あまり遅くならないように」

ナオは母の目を見た。

ずくん。

ナオの胸が痛む。

わたしはこの人を騙している。二度も、騙そうとしている。

——この体は、無事に返す。…必ず。

「…行ってきます」

ナオは、もう一度そう言うと、家を出た。

ずくん。

蒼馬の心臓が、ぎゅっと握りしめられる。

——いつもそうだ、

鈴木さんを出迎える朝、苦しみの瞬間。

いつものように無視され、いつものように煙たがられ、幼なじみだというだけで、それ以上何も望めず。

ずくん。

「痛っ…」

「シィ？ どうしたの？」

「うん、ちょっと、指がね…。ときどき痛むのよ」

——去年、禍物ハナルシに噛まれた指先。

甘噛みだったけれど、こうして時々鈍く痛む。

見たところ何ともないし、すぐに収まるからあまり気にはならないけれど。

ずくん。

杖にすぎるように、やっと立ち上がる。

「ほら、まだ無理なんじゃ…」

「わかってるでしょ？ 今日はどうしても行かなきゃ」

「それはそうだが…。じゃあせめて車で送ろう」

思うように動かない右足を引きずりながら。

「いいの。杖をつけば歩けるんだから」

「でもなあ…」

「パパ？ そろそろ…」

振り返りざまに見せる笑顔には、曇りも濁りもなく。

「そろそろ、子離れしてもいいんじゃないかなあ？」

ずくん。

「痛いよ…」

街のどこかで。

ずくん。

「苦しいよ…」

小さな体をよじって。

ずくん。

「誰か…」

陽の射す方に、手を伸ばし。

ずくん。

待ち伏せ…もとい偶然だったり鈴木奈緒に出会った蒼馬は、鈴木奈緒が現れてほっとすると同時に、胸の痛みを隠して笑顔を見せる。

「あつ、す、鈴木さん、おはおはおは、おはよう」

ナオは溜息をついた。

——期待してはいなかったが、やはり何も進展はナシか。

けれどそれは、とても蒼馬らしい。少しも変わっていないことが、嬉しかった。

「——おはよう、蒼馬くん」

ナオは、とびきりの笑顔を蒼馬に向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3719g/>

通りすがりのナオ

2010年10月8日15時59分発行